



Red Hat Ceph Storage 3

Ubuntu インストールガイド

Ubuntu への Red Hat Ceph Storage のインストール

Red Hat Ceph Storage 3 Ubuntu インストールガイド

Ubuntu への Red Hat Ceph Storage のインストール

Enter your first name here. Enter your surname here.

Enter your organisation's name here. Enter your organisational division here.

Enter your email address here.

法律上の通知

Copyright © 2022 | You need to change the HOLDER entity in the en-US/Installation_Guide_for_Ubuntu.ent file |.

The text of and illustrations in this document are licensed by Red Hat under a Creative Commons Attribution–Share Alike 3.0 Unported license ("CC-BY-SA"). An explanation of CC-BY-SA is available at

<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>

. In accordance with CC-BY-SA, if you distribute this document or an adaptation of it, you must provide the URL for the original version.

Red Hat, as the licensor of this document, waives the right to enforce, and agrees not to assert, Section 4d of CC-BY-SA to the fullest extent permitted by applicable law.

Red Hat, Red Hat Enterprise Linux, the Shadowman logo, the Red Hat logo, JBoss, OpenShift, Fedora, the Infinity logo, and RHCE are trademarks of Red Hat, Inc., registered in the United States and other countries.

Linux[®] is the registered trademark of Linus Torvalds in the United States and other countries.

Java[®] is a registered trademark of Oracle and/or its affiliates.

XFS[®] is a trademark of Silicon Graphics International Corp. or its subsidiaries in the United States and/or other countries.

MySQL[®] is a registered trademark of MySQL AB in the United States, the European Union and other countries.

Node.js[®] is an official trademark of Joyent. Red Hat is not formally related to or endorsed by the official Joyent Node.js open source or commercial project.

The OpenStack[®] Word Mark and OpenStack logo are either registered trademarks/service marks or trademarks/service marks of the OpenStack Foundation, in the United States and other countries and are used with the OpenStack Foundation's permission. We are not affiliated with, endorsed or sponsored by the OpenStack Foundation, or the OpenStack community.

All other trademarks are the property of their respective owners.

概要

本書では、AMD64 および Intel 64 のアーキテクチャーで実行している Ubuntu 16.04 に Red Hat Ceph Storage をインストールする方法を説明します。

目次

第1章 RED HAT CEPH STORAGE とは	4
第2章 RED HAT CEPH STORAGE のインストール要件	6
2.1. 前提条件	6
2.2. RED HAT CEPH STORAGE をインストールするための要件チェックリスト	6
2.3. RED HAT CEPH STORAGE のオペレーティングシステム要件	7
2.4. RED HAT CEPH ストレージリポジトリの有効化	7
前提条件	8
手順	8
関連情報	8
2.5. OSD ノードで RAID コントローラーを使用する際の考慮事項 (オプション)	8
2.6. OBJECT GATEWAY で NVME を使用する際の考慮事項 (オプション)	9
2.7. RED HAT CEPH STORAGE のネットワーク構成の確認	9
関連情報	9
2.8. RED HAT CEPH STORAGE のファイアウォールの設定	9
2.9. SUDO アクセスのある ANSIBLE ユーザーの作成	13
2.10. ANSIBLE でパスワードなしの SSH を有効にする	15
前提条件	15
手順	15
関連情報	16
第3章 RED HAT CEPH STORAGE の導入	17
3.1. 前提条件	17
3.2. RED HAT CEPH STORAGE クラスターのインストール	17
前提条件	18
手順	18
3.3. すべての NVME ストレージに OSD ANSIBLE 設定の構成	30
3.4. メタデータサーバのインストール	31
3.5. CEPH クライアントロールのインストール	32
前提条件	32
手順	32
関連情報	33
3.6. CEPH OBJECT GATEWAY のインストール	34
前提条件	34
手順	34
関連情報	35
3.6.1. マルチサイト Ceph Object Gateway の設定	35
3.7. NFS-GANESHA ゲートウェイのインストール	38
前提条件	38
手順	38
関連情報	39
3.8. LIMIT オプションについて	39
3.9. 関連情報	40
第4章 RED HAT CEPH STORAGE CLUSTER のアップグレード	41
前提条件	42
4.1. ストレージクラスターのアップグレード	43
手順	43
第5章 次のステップ	48
付録A トラブルシューティング	49

A.1. ANSIBLE は、予想よりも少ないデバイスを検出するため、インストールを停止します	49
付録B RED HAT CEPH STORAGE の手動インストール	50
B.1. 前提条件	50
Red Hat Ceph Storage のネットワークタイムプロトコルの設定	50
前提条件	50
手順: RHCS のネットワークタイムプロトコルを構成する	50
関連情報	51
ブートストラップの監視	51
B.2. CEPH MANAGER の手動インストール	57
OSD ブート制約	58
付録C CEPH コマンドラインインターフェースのインストール	64
前提条件	64
手順	64
付録D CEPH ブロックデバイスの手動インストール	65
前提条件	65
手順	65
付録E CEPH OBJECT GATEWAY の手動インストール	68
前提条件	68
手順	68
詳細	70
付録F CEPH のデフォルト設定の上書き	71
付録G RED HAT CEPH STORAGE 2 から 3 への手動アップグレード	72
モニタノードのアップグレード	73
手順	73
G.1. CEPH MANAGER の手動インストール	75
OSD ノードのアップグレード	76
前提条件	76
手順	76
関連情報	79
Ceph Object Gateway ノードのアップグレード	79
前提条件	79
手順	79
関連項目	81
Ceph クライアントノードのアップグレード	81
前提条件	81
手順	81
付録H バージョン 2 と 3 の間の ANSIBLE 変数の変更	83
付録I 既存の CEPH クラスターの ANSIBLE へのインポート	84
付録J ANSIBLE を使用して CEPH クラスターをパージする	85

第1章 RED HAT CEPH STORAGE とは

Red Hat Ceph Storage はスケーラブルでオープンなソフトウェア定義のストレージプラットフォームで、Ceph ストレージシステムの最も安定したバージョンと、Ceph 管理プラットフォーム、デプロイメントユーティリティー、サポートサービスを組み合わせたものです。

Red Hat Ceph Storage は、クラウドインフラストラクチャーおよび Web スケールオブジェクトストレージ用に設計されています。Red Hat Ceph Storage クラスタは、以下のタイプのノードで構成されます。

Red Hat Ceph Storage Ansible 管理ノード

このタイプのノードは、以前のバージョンの Red Hat Ceph Storage に行われた従来の Ceph 管理ノードとして機能します。このタイプのノードでは、以下の機能が提供されます。

- ストレージクラスターの一元管理
- Ceph 設定ファイルおよびキー
- 必要に応じて、セキュリティ上の理由からインターネットにアクセスできないノードに Ceph をインストールするためのローカルリポジトリ

ノードの監視

各モニターノードは、クラスターマップのマスターコピーを維持する monitor デーモン (**ceph-mon**) を実行します。クラスターマップにはクラスタートポロジが含まれます。Ceph クラスタに接続するクライアントは、モニターからクラスターマップの現在のコピーを取得します。これにより、クライアントがクラスターへのデータの読み取りおよび書き込みが可能になります。



重要

Ceph は1つのモニターで実行できますが、実稼働クラスターで高可用性を確保するためには、Red Hat は少なくとも3つのモニターノードを持つデプロイメントのみをサポートします。Red Hat は、750個のOSDを超えるストレージクラスターに合計5つの Ceph Monitor をデプロイすることを推奨します。

OSD ノード

各 Object Storage Device (OSD) ノードは Ceph OSD デーモン (**ceph-osd**) を実行し、ノードに割り当てられている論理ディスクと相互作用します。Ceph は、この OSD ノードにデータを保存します。

Ceph は、非常に少数の OSD ノード (デフォルトは3) で実行できますが、実稼働クラスターは、ストレージクラスターで中程度のスケール (たとえば OSD が50個) で始まります。理想的には、Ceph クラスタに複数の OSD ノードがあり、CRUSH マップを作成して分離された障害ドメインを許可します。

MDS ノード

各 Metadata Server (MDS) ノードは、Ceph ファイルシステム (CephFS) に保存されているファイルに関連する MDS デーモン (**ceph-mds**) を実行します。MDS デーモンは、共有クラスターへのアクセスも調整します。

Object Gateway ノード

Ceph Object Gateway ノードは、Ceph RADOS Gateway デーモン (**ceph-radosgw**) を実行し、Ceph Storage クラスタへの RESTful ゲートウェイを使用するアプリケーションを提供する **librados** 上に構築されたオブジェクトストレージインターフェースです。Ceph Object Gateway は、以下の2つのインターフェースをサポートします。

--

S3

Amazon S3 RESTful API の大規模なサブセットと互換性のあるインターフェースでオブジェクトストレージ機能を提供します。

Swift

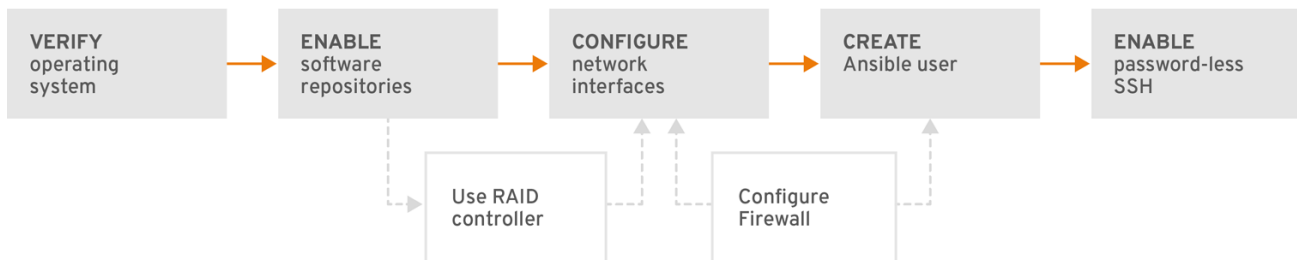
OpenStack Swift API の大規模なサブセットと互換性のあるインターフェースでオブジェクトストレージ機能を提供します。

Ceph アーキテクチャーの詳細は、Red Hat Ceph Storage3 の [アーキテクチャーガイド](#) を参照してください。

最低限推奨されるハードウェアは、[Red Hat Ceph ストレージハードウェア選択ガイド 3](#) を参照してください。

第2章 RED HAT CEPH STORAGE のインストール要件

図2.1 前提条件のワークフロー



CEPH_459707_0818

Red Hat Ceph Storage (RHCS) をインストールする前に、以下の要件をチェックして、各 Monitor、OSD、メタデータサーバー、およびクライアントノードを適宜準備します。

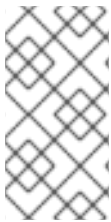
2.1. 前提条件

- ハードウェアが最低必要条件を満たしていることを確認してください。詳細については、Red Hat Ceph Storage3の[ハードウェアガイド](#)を参照してください。

2.2. RED HAT CEPH STORAGE をインストールするための要件チェックリスト

タスク	必須	セクション	推奨事項
オペレーティングシステムのバージョンの確認	はい	「Red Hat Ceph Storage のオペレーティングシステム要件」	
Ceph ソフトウェアリポジトリの有効化	はい	「Red Hat Ceph ストレージリポジトリの有効化」	
OSD ノードでの RAID コントローラーの使用	いいえ	「OSD ノードで RAID コントローラーを使用する際の考慮事項 (オプション)」	RAID コントローラーでライトバックキャッシュを有効にすると、OSD ノードの小規模な I/O 書き込みスループットが増大する場合があります。
ネットワークの設定	はい	「Red Hat Ceph Storage のネットワーク構成の確認」	少なくとも、パブリックネットワークが必要です。ただし、クラスター通信のプライベートネットワークが推奨されます。
ファイアウォールの設定	いいえ	「Red Hat Ceph Storage のファイアウォールの設定」	ファイアウォールは、ネットワークの信頼レベルを大きくすることができます。

タスク	必須	セクション	推奨事項
Ansible ユーザーの作成	はい	「sudo アクセスのある Ansible ユーザーの作成」	すべての Ceph ノードで Ansible ユーザーを作成する必要があります。
パスワードを使用しない SSH の有効化	はい	「Ansible でパスワードなしの SSH を有効にする」	Ansible で必須。

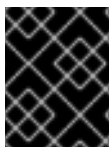


注記

デフォルトでは、**ceph-ansible** は要件として NTP をインストールします。NTP がカスタマイズされている場合は、[Red Hat Ceph Storage の手動インストール](#) の **Red Hat Ceph Storage のネットワークタイムプロトコルの設定** を参照して、Ceph で正しく機能するように NTP を構成する方法を理解してください。

2.3. RED HAT CEPH STORAGE のオペレーティングシステム要件

Red Hat Ceph Storage 3 には、ストレージクラスター内のすべての Ceph ノードで実行される AMD64 または Intel64 アーキテクチャーなどの同種バージョンの Ubuntu16.04.04 が必要です。



重要

Red Hat は異種のオペレーティングシステムやバージョンを使用したクラスターをサポートしていません。

関連情報

- [Red Hat Enterprise Linux 7 のインストールガイド](#)
- [Red Hat Enterprise Linux 7 のシステム管理者ガイド](#)

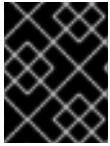
[要求事項のチェックリストに戻る](#)

2.4. RED HAT CEPH ストレージリポジトリの有効化

Red Hat Ceph Storage をインストールする前に、インストール方法を選択する必要があります。Red Hat Ceph Storage では、以下の 2 つのインストール方法がサポートされます。

- **コンテンツ配信ネットワーク (CDN)**
インターネットに直接接続可能な Ceph ノードを持つ Ceph Storage クラスターの場合は、Red Hat Subscription Manager を使用して必要な Ceph リポジトリを有効にします。
- **ローカルリポジトリ**
セキュリティー対策がインターネットにアクセスできない Ceph Storage クラスターでは、ISO イメージとして配信される単一のソフトウェアビルドから Red Hat Ceph Storage 3.3 をインストールします。これにより、ローカルリポジトリをインストールできます。

RHCS ソフトウェアリポジトリにアクセスするには、Red Hat [カスタマーポータル](#) で有効な Red Hat ログインとパスワードが必要です。



重要

アカウントマネージャーに連絡して、<https://rhcs.download.redhat.com> のクレデンシャルを取得してください。

前提条件

- 有効なカスタマーサブスクリプション
- CDN をインストールする場合、RHCS ノードはインターネットに接続できる必要があります。

手順

CDN インストールの場合:

Ansible 管理ノードで、Red Hat Ceph Storage 3 Tools リポジトリを有効にします。

```
$ sudo bash -c 'umask 0077; echo deb
https://customername:customerpasswd@rhcs.download.redhat.com/3-updates/Tools $(lsb_release -
sc) main | tee /etc/apt/sources.list.d/Tools.list'

$ sudo bash -c 'wget -O - https://www.redhat.com/security/fd431d51.txt | apt-key add -'

$ sudo apt-get update
```

ISO インストールの場合:

1. Red Hat カスタマーポータルにログインします。
2. **Downloads** をクリックして、**Software & Download** センターに移動します。
3. Red Hat Ceph Storage エリアで **Download Software** をクリックして、最新バージョンのソフトウェアをダウンロードします。

関連情報

- Red Hat Enterprise Linux の管理者ガイドのシステムの[登録とサブスクリプション](#)の管理の章

[要件チェックリストに戻る](#)

2.5. OSD ノードで RAID コントローラーを使用する際の考慮事項 (オプション)

OSD ノードに 1~2 GB のキャッシュがインストールされている RAID コントローラーがある場合は、ライトバックキャッシュを有効にすると、I/O 書き込みスループットが向上する可能性があります。ただし、キャッシュは不揮発性である必要があります。

最近の RAID コントローラーには通常、電力損失イベント中に揮発性メモリーを不揮発性 NAND メモリーに排出するのに十分な電力を供給するスーパーキャパシタがあります。電源の復旧後に、特定のコントローラーとそのファームウェアがどのように動作するかを理解することが重要です。

RAID コントローラーによっては、手動の介入が必要になります。ハードドライブは、ディスクキャッシュをデフォルトで有効または無効にすべきかどうかに関わらず、オペレーティングシステムにアドバ

サイズします。ただし、特定の RAID コントローラーとファームウェアは、このような情報を提供しません。ファイルシステムが破損しないように、ディスクレベルのキャッシュが無効になっていることを確認します。

ライトバックキャッシュを有効にして、各 Ceph OSD データドライブにライトバックを設定して、単一の RAID 0 ボリュームを作成します。

Serial Attached SCSI (SAS) または SATA 接続の Solid-state Drive (SSD) ディスクも RAID コントローラーに存在する場合は、コントローラーとファームウェアが **pass-through** モードをサポートしているかどうかを確認します。**pass-through** モードを有効にすると、キャッシュロジックが回避され、通常は高速メディアの待ち時間が大幅に低くなります。

[要求事項のチェックリストに戻る](#)

2.6. OBJECT GATEWAY で NVME を使用する際の考慮事項 (オプション)

Red Hat Ceph Storage の Object Gateway 機能を使用する予定で、OSD ノードに NVMe ベースの SSD または SATA SSD がある場合は、[Ceph Object Gateway for Production](#) の手順に従って、[LVM で NVMe を最適に使用すること](#)を検討してください。これらの手順では、ジャーナルとバケットインデックスを SSD に一緒に配置する特別に設計された Ansible Playbook の使用方法を説明します。これにより、すべてのジャーナルを1つのデバイスに配置する場合に比べてパフォーマンスを向上させることができます。NVMe と LVM を最適に使用するための情報は、本インストールガイドと併せて参照してください。

[要求事項のチェックリストに戻る](#)

2.7. RED HAT CEPH STORAGE のネットワーク構成の確認

すべての Red Hat Ceph Storage (RHCS) ノードには、パブリックネットワークが必要です。Ceph クライアントが Ceph monitor ノードおよび Ceph OSD ノードに到達できるパブリックネットワークにネットワークインターフェースカードが設定されている必要があります。

Ceph がパブリックネットワークとは別のネットワークでハートビート、ピアリング、レプリケーション、および復元を実行できるように、クラスターネットワーク用のネットワークインターフェースカードがある場合があります。

ネットワークインターフェースを設定し、変更を永続化します。



重要

Red Hat では、パブリックネットワークとプライベートネットワークの両方に単一のネットワークインターフェースカードを使用することは推奨していません。

関連情報

- ネットワーク設定の詳細は、Red Hat Ceph Storage 3 の『[設定ガイド](#)』の「[ネットワーク設定参照](#)」の章を参照してください。

[要求事項のチェックリストに戻る](#)

2.8. RED HAT CEPH STORAGE のファイアウォールの設定

Red Hat Ceph Storage (RHCS) は **iptables** サービスを使用します。

Monitor デーモンは、Ceph Storage クラスター内の通信にポート **6789** を使用します。

各 Ceph OSD ノードで、OSD デーモンは範囲 **6800-7300** 内の複数のポートを使用します。

- パブリックネットワークを介してクライアントおよびモニターと通信するための1つ
- クラスターネットワーク上で他の OSD にデータを送信する1つ (利用可能な場合)。それ以外の場合は、パブリックネットワーク経由でデータを送信します。
- 可能な場合は、クラスターネットワークを介してハートビートパケットを交換するための1つ。それ以外の場合は、パブリックネットワーク経由

Ceph Manager (**ceph-mgr**) デーモンは、**6800-7300** 範囲内のポートを使用します。同じノード上で Ceph Monitor と **ceph-mgr** デーモンを共存させることを検討してください。

Ceph Metadata Server ノード(**ceph-mds**) は、**6800~7300** の範囲のポートを使用します。

Ceph Object Gateway ノードは、デフォルトで **8080** を使用するように Ansible によって設定されます。ただし、デフォルトのポート (例: ポート **80**) を変更できます。

SSL/TLS サービスを使用するには、ポート **443** を開きます。

前提条件

- ネットワークハードウェアが接続されている。

手順

root ユーザーで以下のコマンドを実行してください。

1. すべての Monitor ノードで、パブリックネットワークの **6789** ポートを開く。

```
iptables -I INPUT 1 -i iface -p tcp -s IP_address/netmask_prefix --dport 6789 -j ACCEPT
```

置き換え

- パブリックネットワーク上のネットワークインターフェースカードの名前を持つ **iface**。
- **IP_address** には、Monitor ノードのネットワークアドレスを指定します。
- クラスレスドメイン間ルーティング (CIDR) 表記のネットマスクを使用した **netmask_prefix**。

例

```
$ sudo iptables -I INPUT 1 -i enp6s0 -p tcp -s 192.168.0.11/24 --dport 6789 -j ACCEPT
```

2. すべての OSD ノードで、パブリックネットワークでポート **6800-7300** を開きます。

```
iptables -I INPUT 1 -i iface -m multiport -p tcp -s IP_address/netmask_prefix --dports 6800:7300 -j ACCEPT
```

置き換え

- パブリックネットワーク上のネットワークインターフェースカードの名前を持つ **iface**。
- OSD ノードのネットワークアドレスを含む **IP_address**。
- **netmask_prefix** には、CIDR 表記のネットマスクを指定します。

例

```
$ sudo iptables -I INPUT 1 -i enp6s0 -m multiport -p tcp -s 192.168.0.21/24 --dports 6800:7300 -j ACCEPT
```

3. すべての Ceph Manager (**ceph-mgr**) ノード (通常は Monitor のノードと同じ) で、パブリックネットワークの **6800~7300** 番ポートを開きます。

```
iptables -I INPUT 1 -i iface -m multiport -p tcp -s IP_address/netmask_prefix --dports 6800:7300 -j ACCEPT
```

置き換え

- パブリックネットワーク上のネットワークインターフェースカードの名前を持つ **iface**。
- OSD ノードのネットワークアドレスを含む **IP_address**。
- **netmask_prefix** には、CIDR 表記のネットマスクを指定します。

例

```
$ sudo iptables -I INPUT 1 -i enp6s0 -m multiport -p tcp -s 192.168.0.21/24 --dports 6800:7300 -j ACCEPT
```

4. すべての Ceph Metadata Server (**ceph-mds**) ノードにおいて、パブリックネットワークでポート **6800** を開きます。

```
iptables -I INPUT 1 -i iface -m multiport -p tcp -s IP_address/netmask_prefix --dports 6800 -j ACCEPT
```

置き換え

- パブリックネットワーク上のネットワークインターフェースカードの名前を持つ **iface**。
- OSD ノードのネットワークアドレスを含む **IP_address**。
- **netmask_prefix** には、CIDR 表記のネットマスクを指定します。

例

```
$ sudo iptables -I INPUT 1 -i enp6s0 -m multiport -p tcp -s 192.168.0.21/24 --dports 6800 -j ACCEPT
```

5. すべての Ceph Object Gateway ノードで、パブリックネットワーク上の関連するポートを開きます。
 - a. デフォルトの Ansible が設定されたポート **8080** を開くには、以下のコマンドを実行します。

```
iptables -I INPUT 1 -i iface -p tcp -s IP_address/netmask_prefix --dport 8080 -j ACCEPT
```

置き換え

- パブリックネットワーク上のネットワークインターフェースカードの名前を持つ **iface**。
- オブジェクトゲートウェイノードのネットワークアドレスを含む **IP_address**。
- **netmask_prefix** には、CIDR 表記のネットマスクを指定します。

例

```
$ sudo iptables -I INPUT 1 -i enp6s0 -p tcp -s 192.168.0.31/24 --dport 8080 -j ACCEPT
```

- b. 任意。Ansible を使用して Ceph Object Gateway をインストールし、使用する Ceph Object Gateway を Ansible が構成するデフォルトのポートを **8080** からポート **80** に変更した場合は、次のポートを開きます。

```
iptables -I INPUT 1 -i iface -p tcp -s IP_address/netmask_prefix --dport 80 -j ACCEPT
```

置き換え

- パブリックネットワーク上のネットワークインターフェースカードの名前を持つ **iface**。
- オブジェクトゲートウェイノードのネットワークアドレスを含む **IP_address**。
- **netmask_prefix** には、CIDR 表記のネットマスクを指定します。

例

```
$ sudo iptables -I INPUT 1 -i enp6s0 -p tcp -s 192.168.0.31/24 --dport 80 -j ACCEPT
```

- c. 任意。SSL/TLS を使用するには、**443** ポートを開きます。

```
iptables -I INPUT 1 -i iface -p tcp -s IP_address/netmask_prefix --dport 443 -j ACCEPT
```

置き換え

- パブリックネットワーク上のネットワークインターフェースカードの名前を持つ **iface**。
- オブジェクトゲートウェイノードのネットワークアドレスを含む **IP_address**。
- **netmask_prefix** には、CIDR 表記のネットマスクを指定します。

例

```
$ sudo iptables -I INPUT 1 -i enp6s0 -p tcp -s 192.168.0.31/24 --dport 443 -j ACCEPT
```

6. ストレージクラスター内のすべての RHCS ノードで変更を永続的にします。

a. **iptables-persistent** パッケージをインストールします。

```
$ sudo apt-get install iptables-persistent
```

b. 表示されるターミナル UI で、**yes** を選択して、現在の **IPv4 iptables** ルールを **/etc/iptables/rules.v4** ファイルに保存し、現在の **IPv6 iptables** ルールを **/etc/iptables/rules.v6** ファイルに保存します。

**注記**

iptables-persistent のインストール後に新しい **iptables** ルールを追加する場合は、新しいルールを **rules** ファイルに追加します。

```
$ sudo iptables-save >> /etc/iptables/rules.v4
```

関連情報

- パブリックネットワークとクラスターネットワークの詳細は、[Red Hat Ceph Storage のネットワーク構成の確認](#)を参照してください。

[要求事項のチェックリストに戻る](#)**2.9. sudo アクセスのある ANSIBLE ユーザーの作成**

Ansible は、ソフトウェアをインストールし、パスワードを要求せずに設定ファイルを作成するための **root** 権限を持つユーザーとして、すべての Red Hat Ceph Storage (RHCS) ノードにログインする必要があります。Ansible を使用して Red Hat Ceph Storage クラスターをデプロイおよび設定する際に、ストレージクラスター内のすべてのノードにパスワードなしの **root** アクセスで Ansible ユーザーを作成する必要があります。

前提条件

- ストレージクラスター内のすべてのノードへの **root** または **sudo** アクセスがある。

手順

1. Ceph ノードに **root** ユーザとしてログインします。

```
ssh root@$HOST_NAME
```

置き換え

- Ceph ノードのホスト名で **\$HOST_NAME**。

例

```
# ssh root@mon01
```

プロンプトに従い **root** パスワードを入力します。

2. 新しい Ansible ユーザーを作成します。

```
adduser $USER_NAME
```

置き換え

- **\$USER_NAME** には、Ansible ユーザーの新しいユーザー名を指定します。

例

```
$ sudo adduser admin
```

プロンプトが表示されたら、このユーザーのパスワードを 2 回入力します。



重要

ceph をユーザー名として使用しないでください。**ceph** ユーザー名は、Ceph デーモン用に予約されます。クラスター全体で統一されたユーザー名を使用すると、使いやすさが向上しますが、侵入者は通常、そのユーザー名をブルートフォース攻撃に使用するため、明白なユーザー名の使用は避けてください。

3. 新規に作成されたユーザーの **sudo** アクセスを設定します。

```
cat << EOF >/etc/sudoers.d/$USER_NAME
$USER_NAME ALL = (root) NOPASSWD:ALL
EOF
```

置き換え

- **\$USER_NAME** には、Ansible ユーザーの新しいユーザー名を指定します。

例

```
$ sudo cat << EOF >/etc/sudoers.d/admin
admin ALL = (root) NOPASSWD:ALL
EOF
```

4. 正しいファイル権限を新しいファイルに割り当てます。

```
chmod 0440 /etc/sudoers.d/$USER_NAME
```

置き換え

- **\$USER_NAME** には、Ansible ユーザーの新しいユーザー名を指定します。

例

■

```
$ sudo chmod 0440 /etc/sudoers.d/admin
```

関連情報

- Red Hat Enterprise Linux7 のシステム管理者ガイドの[新しいユーザーの追加](#)セクション。

[要件チェックリストに戻る](#)

2.10. ANSIBLE でパスワードなしの SSH を有効にする

Ansible 管理ノードで SSH キーペアを生成し、ストレージクラスター内の各ノードに公開キーを配布して、Ansible がパスワードの入力を求められることなくノードにアクセスできるようにします。

前提条件

- sudo** アクセス権を持つ Ansible ユーザーを作成

手順

Ansible 管理ノードから、Ansible ユーザーとして次の手順を実行します。

- SSH キーペアを生成し、デフォルトのファイル名を受け入れ、パスフレーズを空のままにします。

```
[user@admin ~]$ ssh-keygen
```

- 公開鍵をストレージクラスター内のすべてのノードにコピーします。

```
ssh-copy-id $USER_NAME@$HOST_NAME
```

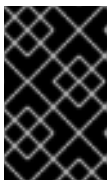
置き換え

- \$USER_NAME** には、Ansible ユーザーの新しいユーザー名を指定します。
- Ceph ノードのホスト名で **\$HOST_NAME**。

例

```
[user@admin ~]$ ssh-copy-id admin@ceph-mon01
```

- ~/ssh/config** ファイルを作成および編集します。



重要

~/ssh/config ファイルを作成および編集することで、**ansible-playbook** コマンドを実行するたびに **-u \$USER_NAME** オプションを指定する必要はありません。

- SSH **config** ファイルを作成します。

```
[user@admin ~]$ touch ~/.ssh/config
```

- b. 編集のために **config** ファイルを開きます。ストレージクラスターの各ノードの **Hostname** と **User** オプションを設定します。

```
Host node1
  Hostname $HOST_NAME
  User $USER_NAME
Host node2
  Hostname $HOST_NAME
  User $USER_NAME
...
```

置き換え

- Ceph ノードのホスト名で **\$HOST_NAME**。
- **\$USER_NAME** には、Ansible ユーザーの新しいユーザー名を指定します。

例

```
Host node1
  Hostname monitor
  User admin
Host node2
  Hostname osd
  User admin
Host node3
  Hostname gateway
  User admin
```

4. `~/ssh/config` ファイルに正しいファイルパーミッションを設定します。

```
[admin@admin ~]$ chmod 600 ~/ssh/config
```

関連情報

- **ssh_config(5)** の man ページ
- Red Hat Enterprise Linux7 の [システム管理者ガイド](#) の [Open SSH](#) の章

[要求事項のチェックリストに戻る](#)

第3章 RED HAT CEPH STORAGE の導入

本章では、Ansible アプリケーションを使用して Red Hat Ceph Storage クラスターおよびその他のコンポーネントをデプロイする方法を説明します (メタデータサーバーや Ceph Object Gateway など)。

- Red Hat Ceph Storage クラスターをインストールするには、[「Red Hat Ceph Storage クラスターのインストール」](#) を参照してください。
- メタデータサーバをインストールするには、[「メタデータサーバのインストール」](#) を参照してください。
- **ceph-client** ロールをインストールするには、[「Ceph クライアントロールのインストール」](#) を参照してください。
- Ceph Object Gatewayをインストールするには、[「Ceph Object Gateway のインストール」](#) を参照してください。
- マルチサイトの Ceph Object Gateway を設定するには、[「マルチサイト Ceph Object Gateway の設定」](#) を参照してください。
- Ansibleの **--limit** オプションについては、[「limit オプションについて」](#) を参照してください。

以前は、Red Hat は Ubuntu 用の **ceph-ansible** パッケージを提供していませんでした。Red Hat Ceph Storage バージョン 3 以降では、Ansible 自動化アプリケーションを使用して Ubuntu ノードから Ceph クラスターをデプロイできます。

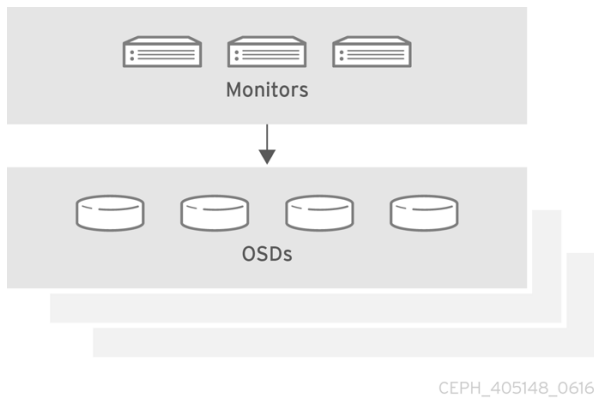
3.1. 前提条件

- 有効なカスタマーサブスクリプションを取得します。
- クラスターノードの準備各ノードで
 - [適切なソフトウェアリポジトリを有効](#) にします。
 - [Ansible ユーザーを作成](#) します。
 - [パスワードなしの SSH アクセスの有効化](#)。
 - 任意。 [ファイアウォールの設定](#)

3.2. RED HAT CEPH STORAGE クラスターのインストール

ceph-ansible playbook 付きの Ansible アプリケーションを使用して、Red Hat Ceph Storage 3 をインストールします。

本番の Ceph ストレージクラスターは、最低でも 3 台のモニターホストと、複数の OSD デーモンを搭載した 3 台の OSD ノードが必要です。



前提条件

- Ansible 管理ノードで、**ceph-ansible** パッケージをインストールします。

```
[user@admin ~]$ sudo apt-get install ceph-ansible
```

手順

指示がない限り、Ansible の管理ノードから以下のコマンドを実行します。

- Ansible のユーザーとして、**ceph-ansible** Playbook で生成された一時的な値を Ansible が保存する **ceph-ansible-keys** ディレクトリーを作成します。

```
[user@admin ~]$ mkdir ~/ceph-ansible-keys
```

- root として、**/etc/ansible/** ディレクトリーに **/usr/share/ceph-ansible/group_vars** ディレクトリーへのシンボリックリンクを作成します。

```
[root@admin ~]# ln -s /usr/share/ceph-ansible/group_vars /etc/ansible/group_vars
```

- /usr/share/ceph-ansible** ディレクトリーに移動します。

```
[root@admin ~]$ cd /usr/share/ceph-ansible
```

- yml.sample** ファイルのコピーを新たに作成します。

```
[root@admin ceph-ansible]# cp group_vars/all.yml.sample group_vars/all.yml
[root@admin ceph-ansible]# cp group_vars/osds.yml.sample group_vars/osds.yml
[root@admin ceph-ansible]# cp site.yml.sample site.yml
```

- コピーしたファイルを編集します。

- group_vars/all.yml** ファイルを編集します。アンコメントする最も一般的な必須およびオプションのパラメータについては、以下の表を参照してください。なお、この表にはすべてのパラメータが含まれているわけではありません。



重要

カスタムクラスター名の使用はサポートされていないため、**cluster: ceph** パラメータに **ceph** 以外の値を設定しないでください。

表3.1 Ansible の一般的な設定

オプション	値	必須	備考
ceph_origin	repository または distro または local	はい	repository 値は、新しいリポジトリーで Ceph をインストールすることを意味します。 distro の値は、個別のリポジトリーファイルが追加されず、Linux ディストリビューションに含まれる Ceph のバージョンをすべて取得することを意味します。 local の値は、Ceph バイナリーがローカルマシンからコピーされることを意味します。
ceph_repository_type	cdn または iso	はい	
ceph_rhcs_iso_path	ISO イメージへのパス	ISO イメージを使用する場合は Yes	
ceph_rhcs_cdn_debian_repo	オンラインの Ubuntu Ceph リポジトリーにアクセスするための認証情報です。例: https://username:password@rhcs.download.redhat.com	はい	
ceph_rhcs_cdn_debian_repo_version	新規インストールには /3-release/ を使用します。更新には /3-updates/ を使用します。	はい	
monitor_interface	Monitor ノードがリッスンするインターフェース	MONITOR_INTERFACE 、 MONITOR_ADDRESS 、または	
monitor_address	Monitor ノードがリッスンするアドレス	MONITOR_ADDRESS_BLOCK が必要です。	

オプション	値	必須	備考
monitor_address_block	Ceph のパブリックネットワークのサブネット		ノードの IP アドレスは不明だが、サブネットはわかっている場合に使用します
ip_version	ipv6	IPv6 アドレスを使用している場合は Yes	
public_network	IPv6 を使用する場合には、Ceph パブリックネットワークの IP アドレスとネットマスク、または対応する IPv6 アドレス	はい	「Red Hat Ceph Storage のネットワーク構成の確認」
cluster_network	Ceph クラスターネットワークの IP アドレスとネットマスク	いいえ、デフォルトは public_network です	

all.yml ファイルの例は次のようになります。

```
ceph_origin: distro
ceph_repository: rhcs
ceph_repository_type: cdn
ceph_rhcs_version: 3
monitor_interface: eth0
public_network: 192.168.0.0/24
```



注記

必ず **all.yml** ファイルで **ceph_origin** を **distro** に設定してください。これにより、インストールプロセスで正しいダウンロードリポジトリが使用されるようになります。



注記

ceph_rhcs_version オプションを **3** に設定すると、最新バージョンの Red Hat Ceph Storage 3 がプルされます。

詳細は、**all.yml** ファイルを参照してください。

- b. **group_vars/osds.yml** ファイルを編集します。アンコメントする最も一般的な必須およびオプションのパラメータについては、以下の表を参照してください。なお、この表にはすべてのパラメータが含まれているわけではありません。



重要

OSD のインストールには、OSD がインストールされている機器とは異なる物理的な機器を使用してください。オペレーティングシステムと OSD 間で同じデバイスを共有すると、パフォーマンスの問題が発生することになります。

表3.2 OSD Ansible 設定

オプション	値	必須	備考
osd_scenario	<p>collocated。ログ先行書き込みとキー/値データ (Blue Store) またはジャーナル (File Store) と OSD データに同じデバイスを使用</p> <p>non-collocated。SSD や NVMe メディアなどの専用デバイスを使用して先行書き込みログとキー/値データ (Blue Store) またはジャーナルデータ (File Store) を保存するため</p> <p>lvm: OSDデータの保存に論理ボリュームマネージャを使用する場合</p>	はい	<p>osd_scenario:non-collocated、ceph-ansible を使用する場合、devices と dedicated_devices の変数の数が一致することを期待します。たとえば、devices で 10 個のディスクを指定する場合は、dedicated_devices で 10 個のエントリを指定する必要があります。</p>
osd_auto_discovery	OSD を自動的に検出する場合は true	osd_scenario:collocated を使用している場合は Yes	devices 設定を使用している場合は使用できません。
devices	ceph data が保存されているデバイスのリスト	デバイスのリストを指定する場合は Yes	osd_auto_discovery 設定を使用する場合は使用できません。 osd_scenario として lvm を使用し、 devices オプションを設定する場合は、 ceph-volume lvm batch モードは最適化された OSD 構成を作成します。
dedicated_devices	ceph journal が保存されている非コロケーション OSD 専用デバイスのリスト	osd_scenario:non-collocated 場合は Yes	非分割型のデバイスであること

オプション	値	必須	備考
dmcrypt	OSD を暗号化する場合は true	いいえ	デフォルトは false
lvm_volumes	File Store または Blue Store 辞書のリスト	osd_scenario: lvm 使用している場合、ストレージデバイスが devices を使用して定義されている場合は Yes	各ディクショナリーには、 data キー、 journal キー、および data_vg キーが含まれている必要があります。論理ボリュームまたはボリュームグループはすべて、完全パスではなく、名前にする必要があります。 data キーおよび journal キーは論理ボリューム (LV) またはパーティションにすることができますが、複数の data 論理ボリュームに1つのジャーナルを使用しないでください。 data_vg キーは、 data 論理ボリューム含むボリュームグループである必要があります。必要に応じて、 journal_vg キーを使用して、ジャーナル LV を含むボリュームグループを指定できます (該当する場合)。サポートされているさまざまな構成については、以下の例を参照してください。
osds_per_device	デバイスごとに作成する OSD 数。	いいえ	デフォルトは 1 です
osd_objectstore	OSD の Ceph オブジェクトストアタイプ。	いいえ	デフォルトは bluestore です。もう一つの選択肢は、 filestore です。アップグレードに必要です。

以下は、**collocated**、**non-collocated**、**lvm** の3つの OSD シナリオを使用した場合の **osds.yml** ファイルの例です。指定されていない場合、デフォルトの OSD オブジェクトストアフォーマットは BlueStore です。

Collocated

```
osd_objectstore: filestore
osd_scenario: collocated
devices:
- /dev/sda
- /dev/sdb
```

コロケートされていない - BlueStore

```
osd_objectstore: bluestore
osd_scenario: non-collocated
devices:
- /dev/sda
- /dev/sdb
- /dev/sdc
- /dev/sdd
dedicated_devices:
- /dev/nvme0n1
- /dev/nvme0n1
- /dev/nvme1n1
- /dev/nvme1n1
```

コロケートされていない例では、デバイスごとに1つずつ、4つの Blue Store OSD が作成されます。この例では、従来のハードドライブ (**sda**、**sdb**、**sdc**、**sdd**) がオブジェクトデータに使用され、ソリッドステートドライブ (SSD) (**/dev/nvme0n1**、**/dev/nvme1n1**) が Blue Store データベースに使用されて書き込みます-先行書き込みログ。この構成では、**/dev/sda** および **/dev/sdb** デバイスを **/dev/nvme0n1** デバイスとペアにし、**/dev/sdc** および **/dev/sdd** デバイスを **/dev/nvme1n1** デバイスとペアにします。

非コロケーション - Filestore

```
osd_objectstore: filestore
osd_scenario: non-collocated
devices:
- /dev/sda
- /dev/sdb
- /dev/sdc
- /dev/sdd
dedicated_devices:
- /dev/nvme0n1
- /dev/nvme0n1
- /dev/nvme1n1
- /dev/nvme1n1
```

LVM simple

```
osd_objectstore: bluestore
osd_scenario: lvm
devices:
```

```
- /dev/sda
- /dev/sdb
```

または

```
osd_objectstore: bluestore
osd_scenario: lvm
devices:
- /dev/sda
- /dev/sdb
- /dev/nvme0n1
```

これらの単純な構成では **ceph-ansible** はバッチモード (**ceph-volume lvm batch**) を使用して OSD を作成します。

最初のシナリオでは、**devices** を従来のハードドライブまたは SSD の場合には、デバイスごとに OSD が1つ作成されます。

2つ目のシナリオでは、従来のハードドライブと SSD が混在している場合、データは従来のハードドライブ (**sda**、**sdb**) に配置され、BlueStore データベース (**block.db**) は SSD (**nvme0n1**) にできる限り大きく作成されます。

LVM advance

```
osd_objectstore: filestore
osd_scenario: lvm
lvm_volumes:
- data: data-lv1
  data_vg: vg1
  journal: journal-lv1
  journal_vg: vg2
- data: data-lv2
  journal: /dev/sda
  data_vg: vg1
```

または

```
osd_objectstore: bluestore
osd_scenario: lvm
lvm_volumes:
- data: data-lv1
  data_vg: data-vg1
  db: db-lv1
  db_vg: db-vg1
  wal: wal-lv1
  wal_vg: wal-vg1
- data: data-lv2
  data_vg: data-vg2
  db: db-lv2
  db_vg: db-vg2
  wal: wal-lv2
  wal_vg: wal-vg2
```

これらの事前シナリオ例では、事前にボリュームグループと論理ボリュームを作成しておく必要があります。それらは **ceph-ansible** によって作成されません。



注記

すべての NVMe SSD を使用する場合は、**osd_scenario:lvn** および **osds_per_device:4** オプションを設定します。詳細は、Red Hat Ceph Storage インストールガイドの Red Hat Enterprise Linux 用の [すべての NVMe Storage の OSDAnsible 設定の構成](#) または [Ubuntu 用のすべての NVMe Storage の OSDAnsible 設定の構成](#) を参照してください。

詳細は、**osds.yml** ファイルのコメントをご覧ください。

6. デフォルトでは **/etc/ansible/hosts** にある Ansible のインベントリファイルを編集します。サンプルホストをコメントアウトすることを忘れないでください。
 - a. **[mons]** セクションの下に Monitor のノードを追加します。

```
[mons]
MONITOR_NODE_NAME1
MONITOR_NODE_NAME2
MONITOR_NODE_NAME3
```

- b. **[osds]** セクションの下に OSD ノードを追加します。ノードがシーケンシャルなネーミングの場合は、レンジの使用を検討してください。

```
[osds]
OSD_NODE_NAME1[1:10]
```



注記

新規インストールの OSD の場合、デフォルトのオブジェクトストア形式は BlueStore です。

- i. オプションで、**devices** および **dedicated_devices** オプションを使用して、OSD ノードが使用するデバイスを指定します。複数のデバイスをリストアップするには、コンマで区切ったリストを使用します。

構文

```
[osds]
CEPH_NODE_NAME devices=["DEVICE_1", "DEVICE_2"] dedicated_devices=
["DEVICE_3", "DEVICE_4"]
```

例

```
[osds]
ceph-osd-01 devices=["/dev/sdc", "/dev/sdd"] dedicated_devices=["/dev/sda",
"/dev/sdb"]
ceph-osd-02 devices=["/dev/sdc", "/dev/sdd", "/dev/sde"] dedicated_devices=
["/dev/sdf", "/dev/sdg"]
```

デバイスを指定しない場合は、**osds.yml** ファイルの **osd_auto_discovery** オプションを **true** に設定してください。



注記

OSD が異なる名前の **デバイス** を使用する場合や、いずれかの OSD でデバイスのいずれかに障害が発生した場合に、`devices` および **`dedicated_devices`** パラメーターを使用すると便利です。

7. オプションで、すべてのデプロイメント(**ベアメタル** または **コンテナ** 内)でホスト固有のパラメーターを使用する場合は、ホストに固有のパラメーターを含めるために **`host_vars`** ディレクトリーにホストファイルを作成します。
 - a. ストレージクラスターに追加される新しい Ceph OSD ノードを `/etc/ansible/host_vars/` ディレクトリーに作成します。

構文

```
touch /etc/ansible/host_vars/OSD_NODE_NAME
```

例

```
[root@admin ~]# touch /etc/ansible/host_vars/osd07
```

- b. ホスト固有のパラメーターでファイルを更新します。 **ベアメタル** デプロイメントでは、`devices:` および **`dedicated_devices:`** セクションをファイルに追加できます。

例

```
devices:
  - /dev/sdc
  - /dev/sdd
  - /dev/sde
  - /dev/sdf

dedicated_devices:
  - /dev/sda
  - /dev/sdb
```

8. オプションで、 **ベアメタル** または **コンテナ** 内のすべてのデプロイメントで、 **`ansible-playbook`** を使用してカスタム CRUSH 階層を作成できます。
 - a. Ansible のインベントリーファイルを設定します。 **`osd_crush_location`** パラメーターを使用して、OSD ホストを CRUSH マップの階層内のどこに配置するかを指定します。OSD の場所を指定するために、2つ以上の CRUSH バケットタイプを指定し、1つのバケットの **`type`** をホストに指定する必要があります。デフォルトでは、これには、 **`root`**、 **`datacenter`**、 **`room`**、 **`row`**、 **`pod`**、 **`pdu`**、 **`rack`**、 **`chassis`** および **`host`** が含まれます。

構文

```
[osds]
CEPH_OSD_NAME osd_crush_location="{ 'root': ROOT_BUCKET, 'rack':
'RACK_BUCKET', 'pod': 'POD_BUCKET', 'host': 'CEPH_HOST_NAME' }"
```

例

```
[osds]
ceph-osd-01 osd_crush_location="{ 'root': 'default', 'rack': 'rack1', 'pod': 'monpod', 'host':
'ceph-osd-01' }"
```

- b. **crush_rule_config** パラメーターと **create_crush_tree** パラメーターを **True** に設定し、デフォルトの CRUSH ルールを使用しない場合は、少なくとも1つの CRUSH ルールを作成します。たとえば、**HDD** デバイスを使用している場合は、次のようにパラメーターを編集します。

```
crush_rule_config: True
crush_rule_hdd:
  name: replicated_hdd_rule
  root: root-hdd
  type: host
  class: hdd
  default: True
crush_rules:
  - "{{ crush_rule_hdd }}"
create_crush_tree: True
```

SSD デバイスを使用している場合は、以下のようにパラメーターを編集します。

```
crush_rule_config: True
crush_rule_ssd:
  name: replicated_ssd_rule
  root: root-ssd
  type: host
  class: ssd
  default: True
crush_rules:
  - "{{ crush_rule_ssd }}"
create_crush_tree: True
```



注記

ssd と **hdd** の両方の OSD がデプロイされていない場合、デフォルトの CRUSH ルールは失敗します。これは、デフォルトのルールに、定義する必要のある **class** パラメーターが含まれているためです。



注記

さらに、上記の手順で説明されているように、カスタムの CRUSH 階層を **host_vars** ディレクトリーの OSD ファイルに追加し、この設定を有効にします。

- c. **group_vars/clients.yml** ファイルで作成した **crush_rules** を使用して **pools** を作成します。

例

```
>>>>>> 3993c70c7f25ab628cbfd9c8e27623403ca18c99
```

```
copy_admin_key: True
user_config: True
```

```
pool1:
  name: "pool1"
  pg_num: 128
  pgp_num: 128
  rule_name: "HDD"
  type: "replicated"
  device_class: "hdd"
pools:
- "{{ pool1 }}"
```

- d. ツリーを表示します。

```
[root@mon ~]# ceph osd tree
```

- e. プールを検証します。

```
# for i in $(rados lspools);do echo "pool: $i"; ceph osd pool get $i crush_rule;done

pool: pool1
crush_rule: HDD
```

9. **ベアメタル** または **コンテナ内** のすべてのデプロイメントで、Ansible インベントリーファイル (デフォルトでは `/etc/ansible/hosts` ファイル) を編集するために開きます。例のホストをコメントアウトします。

- a. **[mgrs]** セクションに Ceph Manager (**ceph-mgr**) ノードを追加します。Ceph Manager デーモンを Monitor ノードにコロケーションします。

```
[mgrs]
<monitor-host-name>
<monitor-host-name>
<monitor-host-name>
```

10. Ansible ユーザーとして、Ansible が Ceph ホストに到達できることを確認します。

```
[user@admin ~]$ ansible all -m ping
```

11. 次の行を `/etc/ansible/ansible.cfg` ファイルに追加します。

```
retry_files_save_path = ~/
```

12. **root** として、`/var/log/ansible/` ディレクトリーを作成し、**ansible** ユーザーに適切な権限を割り当てます。

```
[root@admin ~]# mkdir /var/log/ansible
[root@admin ~]# chown ansible:ansible /var/log/ansible
[root@admin ~]# chmod 755 /var/log/ansible
```

- a. 次のように **log_path** 値を更新して、`/usr/share/ceph-ansible/ansible.cfg` ファイルを編集します。

```
log_path = /var/log/ansible/ansible.log
```


13. Ansible ユーザーとして、`/usr/share/ceph-ansible/` ディレクトリーに移動します。

```
[user@admin ~]$ cd /usr/share/ceph-ansible/
```

14. **ceph-ansible** Playbook を実行します。

```
[user@admin ceph-ansible]$ ansible-playbook site.yml
```



注記

デプロイメントの速度を増やすには、**--forks** オプションを **ansible-playbook** に指定します。デフォルトでは、**ceph-ansible** はフォークを **20** に設定します。この設定では、ノードを同時にインストールします。一度に最大 30 個のノードをインストールするには、**ansible-playbook --forks 30 PLAYBOOKFILE** を実行します。管理ノードのリソースが過剰に使用されていないことを確認するために、監視する必要があります。そうである場合は、**--forks** に渡される数を減らします。

15. モニターノードの root アカウントを使用して、Ceph クラスターのステータスを確認します。

```
[root@monitor ~]# ceph health
HEALTH_OK
```

16. **rados** を使用してクラスターが機能していることを確認します。

- a. モニターノードから、8 つの配置グループを持つテストプールを作成します。

構文

```
[root@monitor ~]# ceph osd pool create <pool-name> <pg-number>
```

例

```
[root@monitor ~]# ceph osd pool create test 8
```

- b. **hello-world.txt** というファイルを作成します。

構文

```
[root@monitor ~]# vim <file-name>
```

例

```
[root@monitor ~]# vim hello-world.txt
```

- c. オブジェクト名 **hello-world** を使用して、**hello-world.txt** をテストプールにアップロードします。

構文

```
[root@monitor ~]# rados --pool <pool-name> put <object-name> <object-file>
```

例

```
[root@monitor ~]# rados --pool test put hello-world hello-world.txt
```

- d. テストプールからファイル名 **fetch.txt** として **hello-world** をダウンロードします。
構文

```
[root@monitor ~]# rados --pool <pool-name> get <object-name> <object-file>
```

例

```
[root@monitor ~]# rados --pool test get hello-world fetch.txt
```

- e. **fetch.txt** の内容を確認してください。

```
[root@monitor ~]# cat fetch.txt
```

出力は以下のようになります。

```
"Hello World!"
```



注記

クラスタの状態を確認するだけでなく、**ceph-mediac** ユーティリティを使用して Ceph Storage Cluster を総合的に診断することができます。『Red Hat Ceph Storage 3 管理ガイド』の「[ceph-mediac を使用した Ceph Storage クラスタの診断](#)」の章を参照してください。

3.3. すべての NVMe ストレージに OSD ANSIBLE 設定の構成

ストレージに NVMe (Non-volatile Memory Express) デバイスのみを使用する場合のパフォーマンスを最適化するには、各 NVMe デバイスに 4 つの OSD を構成します。通常、OSD はデバイスごとに 1 つしか設定されないため、NVMe デバイスのスループットを十分に活用できません。



注記

SSD と HDD を混在させる場合、SSD は OSD ではなくジャーナルまたは **block.db** のいずれかに使用されます。



注記

テストでは、各 NVMe デバイスに 4 つの OSD を設定すると、最適なパフォーマンスが得られます。**osds_per_device:4** を設定することをお勧めしますが、必須ではありません。他の値を設定すると、お客様の環境でより良いパフォーマンスが得られる場合があります。

前提条件

- Ceph クラスタのソフトウェアおよびハードウェアの要件をすべて満たすこと。

手順

1. **osd_scenario:lvms** および **osds_per_device:4** を **group_vars/osds.yml** に設定します。

■

```
osd_scenario: lvm
osds_per_device: 4
```

2. **devices** の下に NVMe デバイスを一覧表示します。

```
devices:
- /dev/nvme0n1
- /dev/nvme1n1
- /dev/nvme2n1
- /dev/nvme3n1
```

3. **group_vars/osds.yml** の設定は以下のようになります。

```
osd_scenario: lvm
osds_per_device: 4
devices:
- /dev/nvme0n1
- /dev/nvme1n1
- /dev/nvme2n1
- /dev/nvme3n1
```



注記

lvm_volumes ではなく、この設定で **devices** を使用する必要があります。これは、**lvm_volumes** が、通常、作成済みの論理ボリュームで使用され、**osds_per_device** は Ceph による論理ボリュームの自動作成を意味するためです。

関連情報

- [Red Hat Enterprise Linux への Red Hat Ceph ストレージクラスターのインストール](#)
- [Ubuntu への Red Hat Ceph Storage クラスターのインストール](#)

3.4. メタデータサーバのインストール

Ansible 自動化アプリケーションを使用して Ceph Metadata Server (MDS) をインストールします。Ceph File System をデプロイするには、メタデータサーバデーモンが必要です。

前提条件

- 稼働中の Red Hat Ceph Storage クラスター

手順

Ansible 管理ノードで以下の手順を実行します。

1. 新しいセクション **[mdss]** を **/etc/ansible/hosts** ファイルに追加します。

```
[mdss]
hostname
hostname
hostname
```

`hostname` は、Ceph Metadata Server をインストールするノードのホスト名に置き換えてください。

2. `/usr/share/ceph-ansible` ディレクトリーに移動します。

```
[root@admin ~]# cd /usr/share/ceph-ansible
```

3. 任意。デフォルトの変数を変更します。

- a. `mdss.yml` という名前の `group_vars/mdss.yml.sample` ファイルのコピーを作成します。

```
[root@admin ceph-ansible]# cp group_vars/mdss.yml.sample group_vars/mdss.yml
```

- b. オプションで、`mdss.yml` のパラメーターを編集します。詳細は、`mdss.yml` を参照してください。

4. Ansible のユーザーとして、Ansible のプレイブックを実行します。

```
[user@admin ceph-ansible]$ ansible-playbook site.yml --limit mdss
```

5. メタデータサーバーをインストールしたら、設定を行います。詳細は、Red Hat Ceph Storage3 の Ceph ファイルシステムガイドの [メタデータサーバーデーモンの設定](#) の章を参照してください。

関連情報

- Red Hat Ceph Storage 3 の [Ceph ファイルシステムガイド](#)
- [limit オプションについて](#)

3.5. CEPH クライアントロールのインストール

`ceph-ansible` ユーティリティーは、Ceph 設定ファイルと管理キーリングをノードにコピーする `ceph-client` ロールを提供します。さらに、このロールを使用してカスタムプールおよびクライアントを作成することができます。

前提条件

- 稼働中の Ceph ストレージクラスター (**active + clean** の状態が望ましい)。
- [2章 Red Hat Ceph Storage のインストール要件](#) に記載されているタスクを実行します。

手順

Ansible 管理ノードで以下のタスクを実行します。

1. 新しいセクション `[clients]` を `/etc/ansible/hosts` ファイルに追加します。

```
[clients]
<client-hostname>
```

`<client-hostname>` は、`ceph-client` ロールをインストールするノードのホスト名に置き換えます。

2. `/usr/share/ceph-ansible` ディレクトリーに移動します。

```
[root@admin ~]# cd /usr/share/ceph-ansible
```

3. **clients.yml** という名前の **clients.yml.sample** ファイルの新しいコピーを作成します。

```
[root@admin ceph-ansible ~]# cp group_vars/clients.yml.sample group_vars/clients.yml
```

4. **group_vars/clients.yml** ファイルを開き、以下の行をコメント解除します。

```
keys:
- { name: client.test, caps: { mon: "allow r", osd: "allow class-read object_prefix
  rbd_children, allow rwx pool=test" }, mode: "{{ ceph_keyring_permissions }}" }
```

- a. **client.test** を実際のクライアント名に置き換え、クライアントキーをクライアント定義の行に追加します。以下に例を示します。

```
key: "ADD-KEYRING-HERE=="
```

これで、行全体の例は次のようになります。

```
- { name: client.test, key: "AQAIN8tUMICVFBAALRHNRV0Z4MXupRw4v9JQ6Q==", caps:
  { mon: "allow r", osd: "allow class-read object_prefix rbd_children, allow rwx pool=test" },
  mode: "{{ ceph_keyring_permissions }}" }
```



注記

ceph-authtool --gen-print-key コマンドは、新しいクライアントキーを生成することができます。

5. 必要に応じて、プールおよびクライアントを作成するように **ceph-client** に指示します。

- a. **clients.yml** を更新します。

- **user_config** 設定のコメントを解除して、**true** に設定します。
- **pools** セクションおよび **keys** セクションのコメントを解除し、必要に応じて更新します。**cephx** 機能を使用して、カスタムプールとクライアント名をまとめて定義できます。

- b. **osd_pool_default_pg_num** 設定を **all.yml** ファイルの **ceph_conf_overrides** セクションに追加します。

```
ceph_conf_overrides:
  global:
    osd_pool_default_pg_num: <number>
```

<number> を配置グループのデフォルト数に置き換えてください。

6. Ansible Playbook の実行:

```
[user@admin ceph-ansible]$ ansible-playbook site.yml --limit clients
```

関連情報

- [「limit オプションについて」](#)

3.6. CEPH OBJECT GATEWAY のインストール

Ceph Object Gateway は、RADOS ゲートウェイとも呼ばれ、**librados** API 上に構築されたオブジェクトストレージインターフェースであり、アプリケーションに Ceph ストレージクラスターへの RESTful ゲートウェイを提供します。

前提条件

- 稼働中の Red Hat Ceph Storage クラスター (**active + clean** 状態が望ましい)
- Ceph Object Gateway ノードで、[2章 Red Hat Ceph Storage のインストール要件](#) に記載されているタスクを実行します。

手順

Ansible 管理ノードで以下のタスクを実行します。

- [rgws]** セクションの下の **/etc/ansible/hosts** ファイルにゲートウェイホストを追加して、それらのロールを Ansible に識別します。ホストに連続する命名がある場合は、以下のように範囲を使用します。

```
[rgws]
<rgw_host_name_1>
<rgw_host_name_2>
<rgw_host_name[3..10]>
```

- Ansible 設定ディレクトリーに移動します。

```
[root@ansible ~]# cd /usr/share/ceph-ansible
```

- サンプルファイルから **rgws.yml** ファイルを作成します。

```
[root@ansible ~]# cp group_vars/rgws.yml.sample group_vars/rgws.yml
```

- group_vars/rgws.yml** ファイルを開いて編集します。管理者キーを Ceph Object Gateway ノードにコピーするには、**copy_admin_key** オプションのコメントを解除します。

```
copy_admin_key: true
```

- rgws.yml** ファイルでは、デフォルトの **7480** ポートとは異なるデフォルトポートを指定することができます。以下に例を示します。

```
ceph_rgw_civetweb_port: 80
```

- all.yml** ファイルは **radosgw_interface** を指定する**必要があります**。以下に例を示します。

```
radosgw_interface: eth0
```

インターフェースを指定すると、同じホストで複数のインスタンスを実行している場合に、Civetweb が別の Civetweb インスタンスと同じ IP アドレスにバインドされないようにします。

- 通常、デフォルトの設定を変更するには、**rgw.yml** ファイル内の設定をアンコメントし、それに従って変更します。**rgw.yml** ファイルにない設定に追加の変更を加えるには、**all.yml** ファイ

ルで **ceph_conf_overrides:** を使用します。例えば、**rgw_dns_name:** に DNS サーバーのホストを設定し、クラスタの DNS サーバーをワイルドカード用に設定して S3 サブドメインを有効にします。

```
ceph_conf_overrides:
  client.rgw.rgw1:
    rgw_dns_name: <host_name>
    rgw_override_bucket_index_max_shards: 16
    rgw_bucket_default_quota_max_objects: 1638400
```

詳細な設定の詳細は、Red Hat Ceph Storage 3 の『[実稼働環境への Ceph Object Gateway ガイド](#)』を参照してください。高度なトピックには以下が含まれます。

- [Ansible グループの設定](#)
- [ストレージストラテジーの開発](#) プールの作成方法および設定方法の詳細は、「[ルートプールの作成](#)」、「[システムプールの作成](#)」、および「[データ配置戦略の作成](#)」セクションを参照してください。
バケットのシャード化の詳細は、「[バケットのシャード化](#)」を参照してください。

8. **group_vars/all.yml** ファイルの **radosgw_interface** パラメーターのコメントを外します。

```
radosgw_interface: <interface>
```

以下を置き換えます。

- Ceph Object Gateway がリッスンするインターフェースを使用する **<interface>**

詳細は、**all.yml** ファイルを参照してください。

9. Ansible Playbook の実行:

```
[user@admin ceph-ansible]$ ansible-playbook site.yml --limit rgws
```



注記

Ansible は、各 Ceph Object Gateway が確実に実行されていることを確認します。

単一サイトの構成の場合は、Ceph ObjectGateway を Ansible 構成に追加します。

マルチサイトデプロイメントでは、各ゾーンの Ansible 設定を行う必要があります。つまり、Ansible によって、そのゾーン用に Ceph Storage クラスタおよびゲートウェイインスタンスが作成されます。

マルチサイトクラスタのインストールが完了したら、マルチサイト用のクラスタの設定方法は、『[Ubuntu 用のオブジェクトゲートウェイガイド](#)』の「[マルチサイト](#)」の章に進んでください。

関連情報

- [「limit オプションについて」](#)
- [Ubuntu のオブジェクトゲートウェイガイド](#)

3.6.1. マルチサイト Ceph Object Gateway の設定

Ansibleは、マルチサイト環境の Ceph Object Gateway のレルム、ゾーングループ、マスターゾーン、セカンダリゾーンを構成します。

前提条件

- Red Hat Ceph Storage クラスターを実行する 2 つ。
- Ceph Object Gateway ノード上で、『Red Hat Ceph Storage インストールガイド』の「[Red Hat Ceph Storage のインストール要件](#)」に記載のタスクを実行します。
- ストレージクラスターごとに 1 つの Ceph Object Gateway をインストールして構成します。

手順

1. プライマリストレージクラスターの Ansible ノードで以下の手順を実行します。
 - a. システムキーを生成し、**multi-site-keys.txt** ファイルで出力を取得します。

```
[root@ansible ~]# echo system_access_key: $(cat /dev/urandom | tr -dc 'a-zA-Z0-9' | fold -w 20 | head -n 1) > multi-site-keys.txt
[root@ansible ~]# echo system_secret_key: $(cat /dev/urandom | tr -dc 'a-zA-Z0-9' | fold -w 40 | head -n 1) >> multi-site-keys.txt
```

- b. Ansible 設定ディレクトリー **/usr/share/ceph-ansible** に移動します。

```
[root@ansible ~]# cd /usr/share/ceph-ansible
```

- c. **group_vars/all.yml** ファイルを開いて編集します。以下のオプションを追加し、**\$ZONE_NAME**、**\$ZONE_GROUP_NAME**、**\$REALM_NAME**、**\$ACCESS_KEY**、**\$SECRET_KEY** の値を適宜更新することで、マルチサイトのサポートを有効にします。複数の Ceph Object Gateway がマスターゾーンにある場合は、**rgw_multisite_endpoints** オプションを設定する必要があります。**rgw_multisite_endpoints** オプションの値は、コンマで区切られたリストで、スペースは含みません。

例

```
rgw_multisite: true
rgw_zone: $ZONE_NAME
rgw_zonemaster: true
rgw_zonesecondary: false
rgw_multisite_endpoint_addr: "{{ ansible_fqdn }}"
rgw_multisite_endpoints:
http://foo.example.com:8080,http://bar.example.com:8080,http://baz.example.com:8080
rgw_zonegroup: $ZONE_GROUP_NAME
rgw_zone_user: zone.user
rgw_realm: $REALM_NAME
system_access_key: $ACCESS_KEY
system_secret_key: $SECRET_KEY
```



注記

ansible_fqdn ドメイン名は、セカンダリストレージクラスターから解決可能である必要があります。



注記

新しい Object Gateway を追加するときは、Ansible Playbook を実行する前に、新しい Object Gateway のエンドポイント URL を使用して **rgw_multisite_endpoints** リストの最後に追加してください。

d. Ansible Playbook の実行:

```
[user@ansible ceph-ansible]$ ansible-playbook site.yml --limit rgws
```

e. Ceph Object Gateway デーモンを再起動します。

```
[root@rgw ~]# systemctl restart ceph-radosgw@rgw.`hostname -s`
```

2. セカンダリーストレージクラスターの Ansible ノードで以下の手順を行います。

a. Ansible 設定ディレクトリ **/usr/share/ceph-ansible** に移動します。

```
[root@ansible ~]# cd /usr/share/ceph-ansible
```

b. **group_vars/all.yml** ファイルを開いて編集します。以下のオプションを追加し、**\$ZONE_NAME**、**\$ZONE_GROUP_NAME**、**\$REALM_NAME**、**\$ACCESS_KEY**、**\$SECRET_KEY** の値を更新することで、マルチサイトのサポートを有効にします。**rgw_zone_user**、**system_access_key**、**system_secret_key** は、マスターゾーンの設定で使用したものと同一値でなければなりません。**rgw_pullhost** オプションには、マスターゾーンの Ceph Object Gateway を指定する必要があります。複数の Ceph Object Gateway がセカンダリゾーンにある場合は、**rgw_multisite_endpoints** オプションを設定する必要があります。**rgw_multisite_endpoints** オプションの値は、コンマで区切られたリストで、スペースは含みません。

例

```
rgw_multisite: true
rgw_zone: $ZONE_NAME
rgw_zonemaster: false
rgw_zonesecondary: true
rgw_multisite_endpoint_addr: "{{ ansible_fqdn }}"
rgw_multisite_endpoints:
http://foo.example.com:8080,http://bar.example.com:8080,http://baz.example.com:8080
rgw_zonegroup: $ZONE_GROUP_NAME
rgw_zone_user: zone.user
rgw_realm: $REALM_NAME
system_access_key: $ACCESS_KEY
system_secret_key: $SECRET_KEY
rgw_pull_proto: http
rgw_pull_port: 8080
rgw_pullhost: $MASTER_RGW_NODE_NAME
```



注記

ansible_fqdn ドメイン名は、プライマリーストレージクラスターから解決可能である必要があります。



注記

新しい Object Gateway を追加するときは、Ansible Playbook を実行する前に、新しい Object Gateway のエンドポイント URL を使用して **rgw_multisite_endpoints** リストの最後に追加してください。

c. Ansible Playbook の実行:

```
[user@ansible ceph-ansible]$ ansible-playbook site.yml --limit rgws
```

d. Ceph Object Gateway デーモンを再起動します。

```
[root@rgw ~]# systemctl restart ceph-radosgw@rgw.`hostname -s`
```

3. マスターおよびセカンダリストレージクラスターで Ansible プレイブックを実行すると、アクティブ-アクティブ Ceph Object Gateway 構成が実行されます。
4. マルチサイト Ceph Object Gateway の設定を確認します。
 - a. 各サイトの Ceph Monitor ノードと Object Gateway ノードから、プライマリーとセカンダリが他のサイトを **curl** できる必要があります。
 - b. 両方のサイトで **radosgw-admin sync status** コマンドを実行します。

3.7. NFS-GANESHA ゲートウェイのインストール

Ceph NFS Ganesha ゲートウェイは、Ceph Object Gateway 上に構築される NFS インターフェースで、ファイルシステム内のファイルを Ceph Object Storage に移行するために POSIX ファイルシステムインターフェースを使用するアプリケーションを Ceph Object Gateway に提供します。

前提条件

- 稼働中の Ceph ストレージクラスター (**active + clean** の状態が望ましい)。
- Ceph Object Gateway を実行するノードを少なくとも1つ。
- [開始前の手順](#) を実行します。

手順

Ansible 管理ノードで以下のタスクを実行します。

1. サンプルファイルから **nfss** ファイルを作成します。

```
[root@ansible ~]# cd /usr/share/ceph-ansible/group_vars
[root@ansible ~]# cp nfss.yml.sample nfss.yml
```

2. **[nfss]** グループの下にゲートウェイホストを **/etc/ansible/hosts** ファイルに追加して、Ansible へのグループメンバーシップを特定します。ホストがシーケンシャルに命名されている場合は、範囲を指定します。以下に例を示します。

```
[nfss]
<nfs_host_name_1>
<nfs_host_name_2>
<nfs_host_name[3..10]>
```

3. Ansible の設定ディレクトリである `/etc/ansible/` に移動します。

```
[root@ansible ~]# cd /usr/share/ceph-ansible
```

4. 管理者キーを Ceph Object Gateway ノードにコピーするには、`/usr/share/ceph-ansible/group_vars/nfss.yml` ファイルの `copy_admin_key` 設定をコメント解除します。

```
copy_admin_key: true
```

5. `/usr/share/ceph-ansible/group_vars/nfss.yml` ファイルの FSAL (File System Abstraction Layer) セクションを設定します。ID、S3 ユーザー ID、S3 アクセスキーおよびシークレットを提供します。NFSv4 の場合は、以下のようになります。

```
#####
# FSAL RGW Config #
#####
#ceph_nfs_rgw_export_id: <replace-w-numeric-export-id>
#ceph_nfs_rgw_pseudo_path: "/"
#ceph_nfs_rgw_protocols: "3,4"
#ceph_nfs_rgw_access_type: "RW"
#ceph_nfs_rgw_user: "cephnfs"
# Note: keys are optional and can be generated, but not on containerized, where
# they must be configured.
#ceph_nfs_rgw_access_key: "<replace-w-access-key>"
#ceph_nfs_rgw_secret_key: "<replace-w-secret-key>"
```



警告

アクセスおよびシークレットキーは任意で、生成できます。

6. Ansible Playbook の実行:

```
[user@admin ceph-ansible]$ ansible-playbook site-docker.yml --limit nfss
```

関連情報

- [「limit オプションについて」](#)
- [Ubuntu のオブジェクトゲートウェイガイド](#)

3.8. LIMIT オプションについて

本セクションでは、Ansible の `--limit` オプションを説明します。

Ansible は、インベントリーファイルの特定のセクションに `site`、`site-docker`、`rolling_upgrade` Ansible Playbook を使用できるようにする `--limit` オプションをサポートしています。

```
$ ansible-playbook site.yml|rolling_upgrade.yml|site-docker.yml --limit  
osds|rgws|clients|mdss|nfss|iscsigws
```

たとえば、ベアメタルに OSD のみを再デプロイするには、Ansible ユーザーとして次のコマンドを実行します。

```
$ ansible-playbook /usr/share/ceph-ansible/site.yml --limit osds
```



重要

1つのノードに Ceph コンポーネントを同じ場所に配置すると、**limit** オプションで指定されたコンポーネントタイプが1つだけであるにもかかわらず、Ansible はノード上のすべてのコンポーネントにプレイブックを適用します。たとえば、OSD とメタデータサーバー (MDS) を含むノードで **--limit osds** オプションを指定して **rolling_update** プレイブックを実行すると、Ansible は OSD と MDS の両方のコンポーネントをアップグレードします。

3.9. 関連情報

- [Ansible ドキュメント](#)

第4章 RED HAT CEPH STORAGE CLUSTER のアップグレード

このセクションでは、Red Hat Ceph Storage の新しいメジャーバージョンまたはマイナーバージョンにアップグレードする方法について説明します。

以前は、Red Hat は Ubuntu 用の **ceph-ansible** パッケージを提供していませんでした。Red Hat Ceph Storage バージョン 3 以降では、Ansible 自動化アプリケーションを使用して Ubuntu ノードから Ceph クラスタをアップグレードできます。

- ストレージクラスタをアップグレードするには、[「ストレージクラスタのアップグレード」](#) を参照してください。

管理ノードの `/usr/share/ceph-ansible/infrastructure-playbooks/` ディレクトリーにある **Ansiblerolling_update.yml** Playbook を使用して、Red Hat Ceph Storage の 2 つのメジャーバージョンまたはマイナーバージョン間でアップグレードするか、非同期更新を適用します。

Ansible は Ceph ノードを以下の順序でアップグレードします。

- ノードの監視
- MGR ノード
- OSD ノード
- MDS ノード
- Ceph Object Gateway ノード
- その他すべての Ceph クライアントノード

注記

Red Hat Ceph Storage 3 では、`/usr/share/ceph-ansible/group_vars/` ディレクトリーにある Ansible 設定ファイルにいくつかの変更が導入されており、特定のパラメーターの名前が変更されたり削除されたりしています。したがって、バージョン 3 にアップグレードした後、**all.yml.sample** ファイルと **osds.yml.sample** ファイルから新しいコピーを作成する前に、**all.yml** ファイルと **osds.yml** ファイルのバックアップコピーを作成してください。変更点の詳細は、[付録H バージョン 2 と 3 の間の Ansible 変数の変更](#) をご覧ください。

注記

Red Hat Ceph Storage 3.1 以降では、Object Gateway および高速 NVMe ベースの SSD (および SATA SSD) を使用する場合のパフォーマンスのためにストレージを最適化するために、新しい Ansible プレイブックが導入されています。Playbook は、ジャーナルとバケットインデックスを SSD に一緒に配置することでこれを行います。これにより、すべてのジャーナルを 1 つのデバイスに配置する場合に比べてパフォーマンスを向上させることができます。これらの Playbook は、Ceph のインストール時に使用されます。既存の OSD は動作し続け、アップグレード中に追加のステップは必要ありません。このようにストレージを最適化するために OSD を同時に再設定する際に、Ceph クラスタをアップグレードする方法はありません。ジャーナルまたはバケットインデックスに異なるデバイスを使用するには、OSD を再プロビジョニングする必要があります。詳細は、[Ceph Object Gateway for Production](#) での [LVM での NVMe の最適な使用](#) を参照してください。

 **重要**

Playbook **rolling_update.yml** には、同時に更新するノード数を調整する **シリアル** 変数が含まれます。Red Hat では、デフォルト値 (**1**) を使用することを強く推奨します。これにより、Ansible がクラスターノードを1つずつアップグレードします。

 **重要**

いずれかの時点でアップグレードが失敗した場合は、**ceph status** コマンドでクラスターの状態を確認して、アップグレードの失敗理由を把握します。不具合の原因や解決方法がわからない場合は、[Red Hat サポート](#) にお問い合わせください。

 **重要**

rolling_update.yml Playbook を使用して Red Hat Ceph Storage 3.x バージョンにアップグレードする場合、Ceph ファイルシステム (Ceph FS) を使用するユーザーは、Metadata Server (MDS) クラスタを手動で更新する必要があります。これは、既知の問題によるものです。

ceph-ansible rolling-upgrade.yml を使用してクラスター全体をアップグレードする前に **/etc/ansible/hosts** の MDS ホストをコメントアウトしてから、MDS を手動でアップグレードします。**etc/ansible/hosts** ファイルでは

```
#[mdss]
#host-abc
```

MDS クラスターの更新方法など、この既知の問題の詳細については、Red Hat Ceph Storage 3.0 [リリースノート](#) を参照してください。

 **重要**

Red Hat Ceph Storage クラスタを以前のバージョンからバージョン 3.2 にアップグレードする場合、Ceph Ansible 設定ではデフォルトのオブジェクトストアタイプが BlueStore に設定されます。OSD オブジェクトストアに FileStore を使用する場合は、Ceph Ansible 設定を明示的に FileStore に設定します。これにより、新たにデプロイされ、置き換えられた OSD は FileStore を使用します。

 **重要**

Playbook **rolling_update.yml** を使用して Red Hat Ceph Storage 3.x バージョンにアップグレードし、マルチサイト Ceph Object Gateway 設定を使用している場合には、マルチサイト設定を指定するために **all.yml** ファイルを手動で更新する必要はありません。

前提条件

- Ceph ノードが Red Hat コンテンツ配信ネットワーク (CDN) に接続されておらず、ISO イメージを使用して Red Hat Ceph Storage をインストールした場合は、ローカルリポジトリを最新バージョンの Red Hat Ceph Storage で更新します。詳しくは「[Red Hat Ceph ストレージリポジトリの有効化](#)」をご覧ください。
- Red Hat Ceph Storage 2.x から 3.x にアップグレードする場合は、Ansible 管理ノードと RBD ミラーリングノードで、Red Hat Ceph Storage 3 Tools リポジトリを有効にします。

```
[root@admin ~]$ sudo bash -c 'umask 0077; echo deb
```

```

https://customername:customerpasswd@rhcs.download.redhat.com/3-updates/Tools
$(lsb_release -sc) main | tee /etc/apt/sources.list.d/Tools.list'
[root@admin ~]$ sudo bash -c 'wget -O - https://www.redhat.com/security/fd431d51.txt | apt-
key add -'
[root@admin ~]$ sudo apt-get update

```

- Ansible 管理ノードで RHCS2.x から 3.x に、または RHCS 3.x から最新バージョンにアップグレードする場合は、**ceph-ansible** パッケージの最新バージョンがインストールされていることを確認してください。

```
[root@admin ~]$ sudo apt-get install ceph-ansible
```

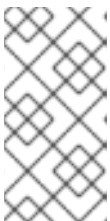
- **rolling_update.yml** Playbook で、**health_osd_check_retries** と **health_osd_check_delay** の値をそれぞれ **50** と **30** に変更します。

```

health_osd_check_retries: 50
health_osd_check_delay: 30

```

これらの値を設定すると、OSD ノードごとに Ansible は最大 25 分待機し、30 秒ごとにストレージクラスターの状態をチェックし、アップグレードプロセスを続行する前に待機します。



注記

ストレージクラスターで使用されているストレージ容量に基づいて、**health_osd_check_retries** オプションの値をスケールアップまたはダウンします。たとえば、436 TB 未満の 218 TB (ストレージ容量の 50%) を使用している場合は、**health_osd_check_retries** オプションを **50** に設定します。

- アップグレードするクラスターに **exclusive-lock** 機能を使用する Ceph Block Device イメージが含まれている場合には、全 Ceph Block Device ユーザーにクライアントをブラックリストに登録するパーミッションがあるようにしてください。

```
ceph auth caps client.<ID> mon 'allow r, allow command "osd blacklist"' osd '<existing-OSD-user-capabilities>'
```

4.1. ストレージクラスターのアップグレード

手順

Ansible の管理ノードから以下のコマンドを使用します。

1. **root** ユーザーとして、**/usr/share/ceph-ansible/** ディレクトリーにナビゲートします。

```
[root@admin ~]# cd /usr/share/ceph-ansible/
```

2. Red Hat Ceph Storage バージョン 3.x から最新バージョンにアップグレードする場合は、この手順をスキップします。**group_vars/all.yml** と **group_vars/osds.yml** ファイルをバックアップします。

```

[root@admin ceph-ansible]# cp group_vars/all.yml group_vars/all_old.yml
[root@admin ceph-ansible]# cp group_vars/osds.yml group_vars/osds_old.yml
[root@admin ceph-ansible]# cp group_vars/clients.yml group_vars/clients_old.yml

```

- Red Hat Ceph Storage バージョン 3.x から最新バージョンにアップグレードする場合は、この手順をスキップします。Red Hat Ceph Storage 2.x から 3.x にアップグレードする場合は、**group_vars/all.yml.sample**、**group_vars/osds.yml.sample**、**group_vars/clients.yml.sample** ファイルの新しいコピーを作成して、それぞれ **group_vars/all.yml**、**group_vars/osds.yml**、**group_vars/clients.yml** に名前を変更します。それらを開いて編集します。詳しくは、[付録H バージョン2 と 3 の間の Ansible 変数の変更](#) と「[Red Hat Ceph Storage クラスターのインストール](#)」をご覧ください。

```
[root@admin ceph-ansible]# cp group_vars/all.yml.sample group_vars/all.yml
[root@admin ceph-ansible]# cp group_vars/osds.yml.sample group_vars/osds.yml
[root@admin ceph-ansible]# cp group_vars/clients.yml.sample group_vars/clients.yml
```

- Red Hat Ceph Storage バージョン 3.x から最新バージョンにアップグレードする場合は、この手順をスキップします。Red Hat Ceph Storage 2.x から 3.x にアップグレードする場合は、**group_vars/clients.yml** ファイルを開き、以下の行をアンコメントします。

```
keys:
- { name: client.test, caps: { mon: "allow r", osd: "allow class-read object_prefix
  rbd_children, allow rwx pool=test" }, mode: "{{ ceph_keyring_permissions }}" }
```

- client.test** を実際のクライアント名に置き換え、クライアントキーをクライアント定義の行に追加します。以下に例を示します。

```
key: "ADD-KEYRING-HERE=="
```

これで、行全体の例は次のようになります。

```
- { name: client.test, key: "AQAIN8tUMICVFBAALRHNRV0Z4MXupRw4v9JQ6Q==", caps:
  { mon: "allow r", osd: "allow class-read object_prefix rbd_children, allow rwx pool=test" },
  mode: "{{ ceph_keyring_permissions }}" }
```



注記

クライアントキーを取得するには、**ceph auth get-or-create** コマンドを実行して、指定されたクライアントのキーを表示します。

- group_vars/all.yml** ファイルで、**upgrade_ceph_packages** オプションのコメントを外し、**True** に設定します。

```
upgrade_ceph_packages: True
```

- group_vars/all.yml** ファイルに **fetch_directory** パラメーターを追加してください。

```
fetch_directory: <full_directory_path>
```

以下を置き換えます。

- <full_directory_path>** を、書き込み可能な場所 (Ansible ユーザーのホームディレクトリーなど) に置き換えます。ストレージクラスターの初期インストール時に使用した既存のパスを入力してください。

既存のパスが失われていたり、なくなっていたりする場合は、まず次のことを行ってください。

- a. 既存の **group_vars/all.yml** ファイルに以下のオプションを追加します。

```
fsid: <add_the_fsid>
generate_fsid: false
```

- b. **take-over-existing-cluster.yml** Ansible playbook を実行します。

```
[user@admin ceph-ansible]$ cp infrastructure-playbooks/take-over-existing-cluster.yml .
[user@admin ceph-ansible]$ ansible-playbook take-over-existing-cluster.yml
```

7. アップグレードするクラスターに Ceph Object Gateway ノードが含まれている場合は、**radosgw_interface** パラメーターを **group_vars/all.yml** ファイルに追加します。

```
radosgw_interface: <interface>
```

以下を置き換えます。

- Ceph Object Gateway がリッスンするインターフェースを使用する **<interface>**

8. Red Hat Ceph Storage 3.2 から、デフォルトの OSD オブジェクトストアは BlueStore です。従来の OSD オブジェクトストアを維持するには、**osd_objectstore** オプションを **group_vars/all.yml** ファイルの **filestore** に明示的に設定する必要があります。

```
osd_objectstore: filestore
```



注記

osd_objectstore オプションを **filestore** に設定し、OSD を置き換えると BlueStore ではなく FileStore が使用されます。

9. **/etc/ansible/hosts** にある Ansible インベントリーファイルで、**[mgrs]** セクションの下に Ceph Manager (**ceph-mgr**) ノードを追加します。Ceph Manager デーモンを Monitor ノードにコロケーションします。バージョン 3.x から最新のバージョンにアップグレードする場合は、この手順をスキップします。

```
[mgrs]
<monitor-host-name>
<monitor-host-name>
<monitor-host-name>
```

10. **infrastructure-playbooks** ディレクトリーから現在のディレクトリーに、**rolling_update.yml** をコピーします。

```
[root@admin ceph-ansible]# cp infrastructure-playbooks/rolling_update.yml .
```



重要

Playbook **rolling_update.yml** では、**limit** の ansible オプションを使用しないでください。

11. **/var/log/ansible/** ディレクトリーを作成し、**ansible** ユーザーに適切な権限を割り当てます。

```
[root@admin ceph-ansible]# mkdir /var/log/ansible
[root@admin ceph-ansible]# chown ansible:ansible /var/log/ansible
[root@admin ceph-ansible]# chmod 755 /var/log/ansible
```

- a. 次のように **log_path** 値を更新して、**/usr/share/ceph-ansible/ansible.cfg** ファイルを編集します。

```
log_path = /var/log/ansible/ansible.log
```

12. Ansible ユーザーとして、Playbook を実行します。

```
[user@admin ceph-ansible]$ ansible-playbook rolling_update.yml
```

13. RBD ミラーリングデーモンノードに **root** ユーザーとしてログインしているときに、**rbd-mirror** を手動でアップグレードします。

```
$ sudo apt-get upgrade rbd-mirror
```

デーモンを再起動:

```
# systemctl restart ceph-rbd-mirror@<client-id>
```

14. クラスターの状態に問題がないことを確認します。**root** ユーザーとしてモニターノードにログインし、**cephstatus** コマンドを実行します。

```
[root@monitor ~]# ceph -s
```

1. OpenStack 環境で動作する場合には、すべての **cephx** ユーザーがプールに RBD プロファイルを使用するように更新します。以下のコマンドは **root** ユーザーとして実行する必要があります。

- Glance ユーザー

```
ceph auth caps client.glance mon 'profile rbd' osd 'profile rbd pool=<glance-pool-name>'
```

例

```
[root@monitor ~]# ceph auth caps client.glance mon 'profile rbd' osd 'profile rbd
pool=images'
```

- Cinder ユーザー

```
ceph auth caps client.cinder mon 'profile rbd' osd 'profile rbd pool=<cinder-volume-pool-
name>, profile rbd pool=<nova-pool-name>, profile rbd-read-only pool=<glance-pool-
name>'
```

例

```
[root@monitor ~]# ceph auth caps client.cinder mon 'profile rbd' osd 'profile rbd
pool=volumes, profile rbd pool=vms, profile rbd-read-only pool=images'
```

- OpenStack の一般ユーザー

```
ceph auth caps client.openstack mon 'profile rbd' osd 'profile rbd-read-only pool=<cinder-volume-pool-name>, profile rbd pool=<nova-pool-name>, profile rbd-read-only pool=<glance-pool-name>'
```

例

```
[root@monitor ~]# ceph auth caps client.openstack mon 'profile rbd' osd 'profile rbd-read-only pool=volumes, profile rbd pool=vms, profile rbd-read-only pool=images'
```



重要

ライブクライアントの移行を実行する前に、これらの CAPS 更新を行います。これにより、クライアントがメモリーで実行している新しいライブラリーを使用でき、古い CAPS 設定がキャッシュから破棄され、新しい RBD プロファイル設定が適用されるようになります。

第5章 次のステップ

これは、最新のデータセンターの困難なストレージ要求を満たすために Red Hat Ceph Storage が実行できることの開始点にすぎません。以下は、さまざまなトピックの情報へのリンクになります。

- パフォーマンスのベンチマークとパフォーマンスカウンターへのアクセスは、Red Hat Ceph Storage 3 の『管理ガイド』の「[パフォーマンスのベンチマーク](#)」の章を参照してください。
- スナップショットの作成および管理。Red Hat Ceph Storage 3 の『ブロックデバイスガイド』の「[スナップショット](#)」の章を参照してください。
- Red Hat Ceph Storage クラスターの拡張については、Red Hat Ceph Storage 3 の『管理ガイド』の「[クラスターサイズの管理](#)」の章を参照してください。
- Ceph Block Device のミラーリングは、Red Hat Ceph Storage 3 の『ブロックデバイスガイド』の「[ブロックデバイスのミラーリング](#)」の章を参照してください。
- プロセス管理。Red Hat Ceph Storage 3 の『管理ガイド』の「[プロセスの管理](#)」の章を参照してください。
- 調整可能なパラメーター。Red Hat Ceph Storage 3 の「[設定ガイド](#)」を参照してください。
- OpenStack のバックエンドストレージとして Ceph を使用する場合には、Red Hat OpenStack Platform の『ストレージガイド』の「[バックエンド](#)」セクションを参照してください。

付録A トラブルシューティング

A.1. ANSIBLE は、予想よりも少ないデバイスを検出するため、インストールを停止します

Ansible 自動化アプリケーションはインストールプロセスを停止し、以下のエラーを返します。

```
- name: fix partitions gpt header or labels of the osd disks (autodiscover disks)
  shell: "sgdisk --zap-all --clear --mbrtogpt -- /dev/{{ item.0.item.key }} || sgdisk --zap-all --clear --mbrtogpt -- /dev/{{ item.0.item.key }}"
  with_together:
    - "{{ osd_partition_status_results.results }}"
    - "{{ ansible_devices }}"
  changed_when: false
  when:
    - ansible_devices is defined
    - item.0.item.value.removable == "0"
    - item.0.item.value.partitions|count == 0
    - item.0.rc != 0
```

エラー内容:

`/usr/share/ceph-ansible/group_vars/osds.yml` ファイルで `osd_auto_discovery` パラメーターが `true` に設定されている場合、Ansible は利用可能なすべてのデバイスを自動的に検出して設定します。このプロセス中、Ansible はすべての OSD が同じデバイスを使用することを想定します。デバイスは、Ansible が名前を検出するのと同じ順序で名前を取得します。いずれかの OSD でデバイスのいずれかが失敗すると、Ansible は障害が発生したデバイスの検出に失敗し、インストールプロセス全体を停止します。

状況例:

- 3つの OSD ノード (`host1`、`host2`、`host3`) は、`/dev/sdb` ディスク、`/dev/sdc` ディスク、および `dev/sdd` ディスクを使用します。
- `host2` では、`/dev/sdc` ディスクに障害が発生し、削除されます。
- 次の再起動時に、Ansible は削除した `/dev/sdc` ディスクの検出に失敗し、`host2`、`/dev/sdb` および `/dev/sdc` (以前は `/dev/sdd`) には2つのディスクのみが使用されることを想定します。
- Ansible はインストールプロセスを停止し、上記のエラーメッセージを返します。

この問題を修正するには、以下を実行します。

`/etc/ansible/hosts` ファイルで、障害が発生したディスクを持つ OSD ノードが使用するデバイスを指定します (上記の例の `host2`)。

```
[osds]
host1
host2 devices="[ '/dev/sdb', '/dev/sdc' ]"
host3
```

詳しくは [3章 Red Hat Ceph Storage の導入](#) をご覧ください。

付録B RED HAT CEPH STORAGE の手動インストール



重要

Red Hat は、手動でデプロイしたクラスターのアップグレードをサポートしたり、テストしたりしません。したがって、Red Hat は、Ansible を使用して Red Hat Ceph Storage 3 で新規クラスターをデプロイすることを推奨します。詳しくは [3章 Red Hat Ceph Storage の導入](#) をご覧ください。

`apt-get` などのコマンドラインユーティリティを使用して、手動でデプロイされたクラスターをインストールできます。

すべての Ceph クラスターにはモニターが少なくとも1つ、最低でも OSD がクラスターに保存されているオブジェクトのコピーとして必要になります。Red Hat は、実稼働環境に3台のモニターを使用し、少なくとも3つのオブジェクトストレージデバイス (OSD) を使用することを推奨します。

コマンドラインインターフェースを使用して Ceph Storage クラスターをインストールするには、以下の手順を行います。

- [最初のモニターノードをブートストラップします。](#)
- [Ceph Manager デーモンのインストール。](#)
- [オブジェクトストレージデバイス \(OSD\) ノードの追加。](#)

B.1. 前提条件

Red Hat Ceph Storage のネットワークタイムプロトコルの設定

すべての Ceph Monitor および OSD ノードでは、ネットワークタイムプロトコル (NTP) を構成する必要があります。Ceph ノードが NTP ピアであることを確認します。NTP は、クロックドリフトから発生する問題を先取りするのに役立ちます。



注記

Ansible を使用して Red Hat Ceph Storage クラスターをデプロイする場合、Ansible は NTP を自動的にインストール、構成、および有効にします。

前提条件

- 有効なタイムソースへのネットワークアクセス。

手順: RHCS のネットワークタイムプロトコルを構成する

ストレージクラスターのすべての RHCS ノードで、`root` ユーザーとして以下の手順を実行します。

1. `ntp` パッケージをインストールします。

```
$ sudo apt-get install ntp
```

```
$ sudo systemctl start ntp
$ sudo systemctl enable ntp
```

1. NTP が正しくクロックを同期していることを確認してください。

```
$ ntpq -p
```

関連情報

- Red Hat Enterprise Linux7 の [システム管理者ガイド](#) の [ntpd を使用した NTP の設定](#) の章。

ブートストラップの監視

Monitor のブートストラップおよび Ceph Storage クラスターの拡張には、以下のデータが必要です。

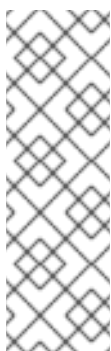
一意識別子

ファイルシステム識別子 (**fsid**) はクラスターの一意的識別子です。**fsid** は、Ceph ストレージクラスターが Ceph ファイルシステムに主に使用する場合に使用されていました。Ceph はネイティブのインターフェース、ブロックデバイス、およびオブジェクトストレージゲートウェイのインターフェースもサポートするようになり、**fsid** は一部の誤検出になります。

クラスター名

Ceph クラスターにはクラスター名があり、これはスペースを含まないシンプルな文字列です。デフォルトのクラスター名は **ceph** ですが、別のクラスター名を指定することもできます。デフォルトのクラスター名を上書きすることは、複数のクラスターを扱う場合に特に有効です。

マルチサイトアーキテクチャーで複数のクラスターを実行する場合、クラスター名 (**us-west**、**us-east** など) は、現在のコマンドラインセッションのクラスターを識別します。



注記

コマンドラインインターフェイスでクラスター名を識別するには、クラスター名を使用して Ceph 構成ファイルを指定します (例: **ceph.conf**、**us-west.conf**、**us-east.conf** など)。

たとえば、以下のようになります。

```
# ceph --cluster us-west.conf ...
```

監視名

クラスター内の各 Monitor インスタンスには一意の名前があります。一般的には、Ceph Monitor 名はノード名です。Red Hat では、ノードごとに Ceph Monitor を 1 つ推奨していますが、Ceph OSD デーモンを Ceph Monitor デーモンと同じ場所に配置しないことを推奨します。短いノード名を取得するには、**hostname -s** コマンドを使用します。

マップの監視

初期モニターのブートストラップでは、モニターマップを生成する必要があります。Monitor マップには以下が必要です。

- ファイルシステム識別子 (**fsid**)
- クラスター名、または **ceph** のデフォルトのクラスター名が使用されます。
- 1 つ以上のホスト名とその IP アドレス

キーリングの監視

モニターは、秘密鍵を使用して相互に通信します。Monitor 秘密鍵でキーリングを生成し、初期 Monitor のブートストラップ時にこれを提供する必要があります。

管理者キーリング

ceph コマンドラインインターフェースユーティリティを使用するには、**client.admin** ユーザーを作成し、そのキーリングを生成します。また、**client.admin** ユーザーを Monitor キーリングに追加する必要があります。

前述の要件は、Ceph 設定ファイルの作成を意味するものではありません。ただし、Red Hat では、Ceph 設定ファイルを作成し、少なくとも **fsid**、**mon initial members**、および **mon host** の設定で設定することを推奨します。

実行時にすべての Monitor 設定を取得および設定できます。ただし、Ceph 設定ファイルには、デフォルト値を上書きする設定のみが含まれる場合があります。Ceph 設定ファイルに設定を追加すると、デフォルト設定が上書きされます。Ceph 設定ファイルでこれらの設定を維持すると、クラスターを簡単に維持できます。

初期モニターをブートストラップするには、以下の手順を実行します。

1. Red Hat Ceph Storage 3 Monitor リポジトリを有効にします。

```
$ sudo bash -c 'umask 0077; echo deb
https://customername:customerpasswd@rhcs.download.redhat.com/3-updates/MON
$(lsb_release -sc) main | tee /etc/apt/sources.list.d/MON.list'
$ sudo bash -c 'wget -O - https://www.redhat.com/security/fd431d51.txt | apt-key add -'
$ sudo apt-get update
```

2. 初期 Monitor ノードで、**root** で **ceph-mon** パッケージをインストールします。

```
$ sudo apt-get install ceph-mon
```

3. **root** で、**/etc/ceph/** ディレクトリーに Ceph 設定ファイルを作成します。デフォルトでは、Ceph は **ceph.conf** を使用します。ここで、**ceph** はクラスター名を反映します。

構文

```
# touch /etc/ceph/<cluster_name>.conf
```

例

```
# touch /etc/ceph/ceph.conf
```

4. **root** でクラスターの一意的識別子を生成し、一意の ID を Ceph 設定ファイルの **[global]** セクションに追加します。

構文

```
# echo "[global]" > /etc/ceph/<cluster_name>.conf
# echo "fsid = `uuidgen`" >> /etc/ceph/<cluster_name>.conf
```

例

```
# echo "[global]" > /etc/ceph/ceph.conf
# echo "fsid = `uuidgen`" >> /etc/ceph/ceph.conf
```

5. 現在の Ceph 設定ファイルを表示します。


```
$ cat /etc/ceph/ceph.conf
[global]
fsid = a7f64266-0894-4f1e-a635-d0aeaca0e993
```

- root** として、最初の Monitor を Ceph 設定ファイルに追加します。

構文

```
# echo "mon initial members = <monitor_host_name>[,<monitor_host_name>]" >>
/etc/ceph/<cluster_name>.conf
```

例

```
# echo "mon initial members = node1" >> /etc/ceph/ceph.conf
```

- root** として、初期 Monitor の IP アドレスを Ceph 設定ファイルに追加します。

構文

```
# echo "mon host = <ip-address>[,<ip-address>]" >> /etc/ceph/<cluster_name>.conf
```

例

```
# echo "mon host = 192.168.0.120" >> /etc/ceph/ceph.conf
```



注記

IPv6 アドレスを使用するには、**ms bind ipv6** オプションを **true** に設定します。詳細は、Red Hat Ceph Storage 3 の『設定ガイド』の「[バインド](#)」セクションを参照してください。

- root** として、クラスターのキーリングを作成し、Monitor シークレットキーを生成します。

構文

```
# ceph-authtool --create-keyring /tmp/<cluster_name>.mon.keyring --gen-key -n mon. --cap
mon '<capabilities>'
```

例

```
# ceph-authtool --create-keyring /tmp/ceph.mon.keyring --gen-key -n mon. --cap mon 'allow *'
creating /tmp/ceph.mon.keyring
```

- root** で管理者キーリングを生成し、**<cluster_name>.client.admin.keyring** ユーザーを生成し、ユーザーをキーリングに追加します。

構文

```
# ceph-authtool --create-keyring /etc/ceph/<cluster_name>.client.admin.keyring --gen-key -n
client.admin --set-uid=0 --cap mon '<capabilities>' --cap osd '<capabilities>' --cap mds
'<capabilities>'
```

-

例

```
# ceph-authtool --create-keyring /etc/ceph/ceph.client.admin.keyring --gen-key -n
client.admin --set-uid=0 --cap mon 'allow *' --cap osd 'allow *' --cap mds 'allow'
creating /etc/ceph/ceph.client.admin.keyring
```

10. **root** として、**<cluster_name>.client.admin.keyring** キーを**<cluster_name>.mon.keyring** に追加します。

構文

```
# ceph-authtool /tmp/<cluster_name>.mon.keyring --import-keyring
/etc/ceph/<cluster_name>.client.admin.keyring
```

例

```
# ceph-authtool /tmp/ceph.mon.keyring --import-keyring /etc/ceph/ceph.client.admin.keyring
importing contents of /etc/ceph/ceph.client.admin.keyring into /tmp/ceph.mon.keyring
```

11. Monitor マップを生成します。初期 Monitor のノード名、IP アドレス、および **fsid** を使用して指定し、**/tmp/monmap** として保存します。

構文

```
$ monmaptool --create --add <monitor_host_name> <ip-address> --fsid <uuid>
/tmp/monmap
```

例

```
$ monmaptool --create --add node1 192.168.0.120 --fsid a7f64266-0894-4f1e-a635-
d0aeaca0e993 /tmp/monmap
monmaptool: monmap file /tmp/monmap
monmaptool: set fsid to a7f64266-0894-4f1e-a635-d0aeaca0e993
monmaptool: writing epoch 0 to /tmp/monmap (1 monitors)
```

12. 初期モニターノードで、**root** としてデフォルトのデータディレクトリーを作成します。

構文

```
# mkdir /var/lib/ceph/mon/<cluster_name>-<monitor_host_name>
```

例

```
# mkdir /var/lib/ceph/mon/ceph-node1
```

13. **root** として、最初の Monitor デーモンに Monitor マップとキーリングを設定します。

構文

```
# ceph-mon [--cluster <cluster_name>] --mkfs -i <monitor_host_name> --monmap
/tmp/monmap --keyring /tmp/<cluster_name>.mon.keyring
```

-

例

```
# ceph-mon --mkfs -i node1 --monmap /tmp/monmap --keyring /tmp/ceph.mon.keyring
ceph-mon: set fsid to a7f64266-0894-4f1e-a635-d0aeaca0e993
ceph-mon: created monfs at /var/lib/ceph/mon/ceph-node1 for mon.node1
```

14. 現在の Ceph 設定ファイルを表示します。

```
# cat /etc/ceph/ceph.conf
[global]
fsid = a7f64266-0894-4f1e-a635-d0aeaca0e993
mon_initial_members = node1
mon_host = 192.168.0.120
```

さまざまな Ceph 構成設定に関する詳細は、Red Hat Ceph Storage 3 の『[設定ガイド](#)』を参照してください。Ceph 設定ファイルの例では、最も一般的な構成設定の一部を示しています。

例

```
[global]
fsid = <cluster-id>
mon initial members = <monitor_host_name>[, <monitor_host_name>]
mon host = <ip-address>[, <ip-address>]
public network = <network>[, <network>]
cluster network = <network>[, <network>]
auth cluster required = cephx
auth service required = cephx
auth client required = cephx
osd journal size = <n>
osd pool default size = <n> # Write an object n times.
osd pool default min size = <n> # Allow writing n copy in a degraded state.
osd pool default pg num = <n>
osd pool default ppg num = <n>
osd crush chooseleaf type = <n>
```

15. **root**として、**done** ファイルを作成します。

構文

```
# touch /var/lib/ceph/mon/<cluster_name>-<monitor_host_name>/done
```

例

```
# touch /var/lib/ceph/mon/ceph-node1/done
```

16. **root**として、新しく作成されたディレクトリーおよびファイルで所有者とグループのアクセス権を更新します。

構文

```
# chown -R <owner>:<group> <path_to_directory>
```

例

```
# chown -R ceph:ceph /var/lib/ceph/mon
# chown -R ceph:ceph /var/log/ceph
# chown -R ceph:ceph /var/run/ceph
# chown ceph:ceph /etc/ceph/ceph.client.admin.keyring
# chown ceph:ceph /etc/ceph/ceph.conf
# chown ceph:ceph /etc/ceph/rbdmap
```

**注記**

Ceph Monitor ノードが OpenStack Controller ノードと同じ場所にある場合、Glance および Cinder キーリングファイルは、それぞれ **glance** および **cinder** によって所有されている必要があります。以下に例を示します。

```
# ls -l /etc/ceph/
...
-rw-----. 1 glance glance    64 <date> ceph.client.glance.keyring
-rw-----. 1 cinder cinder    64 <date> ceph.client.cinder.keyring
...
```

17. カスタム名を持つストレージクラスターの場合、**root** として次の行を追加します。

構文

```
$ sudo echo "CLUSTER=<custom_cluster_name>" >> /etc/default/ceph
```

例

```
$ sudo echo "CLUSTER=test123" >> /etc/default/ceph
```

18. **root** として、初期モニターノードで **ceph-mon** プロセスを開始して有効にします。

構文

```
$ sudo systemctl enable ceph-mon.target
$ sudo systemctl enable ceph-mon@<monitor_host_name>
$ sudo systemctl start ceph-mon@<monitor_host_name>
```

例

```
$ sudo systemctl enable ceph-mon.target
$ sudo systemctl enable ceph-mon@node1
$ sudo systemctl start ceph-mon@node1
```

19. **root** として、monitor デーモンが実行していることを確認します。

構文

```
# sudo systemctl status ceph-mon@<monitor_host_name>
```

例

```
# sudo systemctl status ceph-mon@node1
● ceph-mon@node1.service - Ceph cluster monitor daemon
   Loaded: loaded (/usr/lib/systemd/system/ceph-mon@.service; enabled; vendor preset: disabled)
   Active: active (running) since Wed 2018-06-27 11:31:30 PDT; 5min ago
   Main PID: 1017 (ceph-mon)
   CGroup: /system.slice/system-ceph\x2dmon.slice/ceph-mon@node1.service
           └─1017 /usr/bin/ceph-mon -f --cluster ceph --id node1 --setuser ceph --setgroup ceph

Jun 27 11:31:30 node1 systemd[1]: Started Ceph cluster monitor daemon.
Jun 27 11:31:30 node1 systemd[1]: Starting Ceph cluster monitor daemon...
```

Red Hat Ceph Storage Monitor をストレージクラスターに追加するには、Red Hat Ceph Storage 3 の『管理ガイド』の「[モニターの追加](#)」セクションを参照してください。

B.2. CEPH MANAGER の手動インストール

通常、Ansible 自動化ユーティリティーは、Red Hat Ceph Storage クラスターをデプロイする際に Ceph Manager デーモン (**ceph-mgr**) をインストールします。ただし、Ansible を使用して Red Hat Ceph Storage を管理しない場合は、Ceph Manager を手動でインストールすることができます。Red Hat は、Ceph Manager デーモンと Ceph Monitor デーモンを同じノードに配置することを推奨します。

前提条件

- 稼働中の Red Hat Ceph Storage クラスター
- **root** または **sudo** アクセス
- **rhel-7-server-rhceph-3-mon-els-rpms** リポジトリが有効
- ファイアウォールを使用している場合は、パブリックネットワーク上でポート **6800-7300** を開く

手順

ceph-mgr がデプロイされるノードで、**root** ユーザーまたは **sudo** ユーティリティーで以下のコマンドを使用します。

1. **ceph-mgr** パッケージをインストールします。

```
[user@node1 ~]$ sudo apt-get install ceph-mgr
```

2. **/var/lib/ceph/mgr/ceph-hostname/** ディレクトリを作成します。

```
mkdir /var/lib/ceph/mgr/ceph-hostname
```

hostname を、**ceph-mgr** デーモンがデプロイされるノードのホスト名に置き換えます。以下に例を示します。

```
[user@node1 ~]$ sudo mkdir /var/lib/ceph/mgr/ceph-node1
```

- 新しく作成されたディレクトリーで、**ceph-mgr** デーモンの認証キーを作成します。

```
[user@node1 ~]$ sudo ceph auth get-or-create mgr.`hostname` -s` mon 'allow profile mgr'
osd 'allow *' mds 'allow *' -o /var/lib/ceph/mgr/ceph-node1/keyring
```

- `/var/lib/ceph/mgr/` ディレクトリーの所有者とグループを **ceph:ceph** に変更します。

```
[user@node1 ~]$ sudo chown -R ceph:ceph /var/lib/ceph/mgr
```

- ceph-mgr** ターゲットを有効にします。

```
[user@node1 ~]$ sudo systemctl enable ceph-mgr.target
```

- ceph-mgr** インスタンスを有効にして開始します。

```
systemctl enable ceph-mgr@hostname
systemctl start ceph-mgr@hostname
```

`hostname` を、**ceph-mgr** をデプロイするノードのホスト名に置き換えます。以下に例を示します。

```
[user@node1 ~]$ sudo systemctl enable ceph-mgr@node1
[user@node1 ~]$ sudo systemctl start ceph-mgr@node1
```

- ceph-mgr** デーモンが正常に起動していることを確認します。

```
ceph -s
```

出力には、**services:** セクションの下に以下の行と同様の行が含まれます。

```
mgr: node1(active)
```

- 追加の **ceph-mgr** デーモンをインストールして、現在のアクティブなデーモンに障害が発生した場合にアクティブになるスタンバイデーモンとして機能します。

関連情報

- [「Red Hat Ceph Storage のインストール要件」](#)

OSD ブート制約

モニターを最初に実行したら、オブジェクトストレージデバイス (OSD) の追加を開始できます。オブジェクトのコピー数を処理するのに十分な OSD があるまで、クラスターは **active + clean** 状態に到達できません。

オブジェクトのデフォルトのコピー数は 3 です。少なくとも 3 つの OSD ノードが必要です。ただし、オブジェクトのコピーを 2 つだけ使用する場合には、OSD ノードを 2 つだけ追加してから、Ceph 設定ファイルの **osd pool default size** および **osd pool default min size** 設定を更新します。

詳細は、Red Hat Ceph Storage 3 の『設定』の「[OSD 設定参照](#)」セクションを参照してください。

初期モニターのブートストラップ後に、クラスターにはデフォルトの CRUSH マップがあります。ただし、CRUSH マップには Ceph ノードにマッピングされた Ceph OSD デーモンがありません。

OSD をクラスターに追加し、デフォルトの CRUSH マップを更新するには、各 OSD ノードで以下のコマンドを実行します。

1. Red Hat Ceph Storage 3 OSD リポジトリを有効にします。

```
$ sudo bash -c 'umask 0077; echo deb
https://customername:customerpasswd@rhcs.download.redhat.com/3-updates/OSD
$(lsb_release -sc) main | tee /etc/apt/sources.list.d/OSD.list'
$ sudo bash -c 'wget -O - https://www.redhat.com/security/fd431d51.txt | apt-key add -'
$ sudo apt-get update
```

2. **root** で Ceph OSD ノードに **ceph-osd** パッケージをインストールします。

```
$ sudo apt-get install ceph-osd
```

3. Ceph 設定ファイルと管理キーリングファイルを初期 Monitor ノードから OSD ノードにコピーします。

構文

```
# scp <user_name>@<monitor_host_name>:<path_on_remote_system>
<path_to_local_file>
```

例

```
# scp root@node1:/etc/ceph/ceph.conf /etc/ceph
# scp root@node1:/etc/ceph/ceph.client.admin.keyring /etc/ceph
```

4. OSD 用の Universally Unique Identifier (UUID) を生成します。

```
$ uuidgen
b367c360-b364-4b1d-8fc6-09408a9cda7a
```

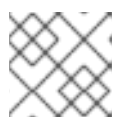
5. **root** として、OSD インスタンスを作成します。

構文

```
# ceph osd create <uuid> [<osd_id>]
```

例

```
# ceph osd create b367c360-b364-4b1d-8fc6-09408a9cda7a
0
```



注記

このコマンドは、後続のステップに必要な OSD 番号識別子を出力します。

6. **root** として、新規 OSD のデフォルトディレクトリーを作成します。

構文

■

```
# mkdir /var/lib/ceph/osd/<cluster_name>-<osd_id>
```

例

```
# mkdir /var/lib/ceph/osd/ceph-0
```

7. **root** として、OSD として使用するドライブを準備し、作成したディレクトリーにマウントします。Ceph データおよびジャーナル用にパーティションを作成します。ジャーナルとデータパーティションは同じディスクに配置できます。以下の例では、15 GB のディスクを使用しています。

構文

```
# parted <path_to_disk> mklabel gpt
# parted <path_to_disk> mkpart primary 1 10000
# mkfs -t <fstype> <path_to_partition>
# mount -o noatime <path_to_partition> /var/lib/ceph/osd/<cluster_name>-<osd_id>
# echo "<path_to_partition> /var/lib/ceph/osd/<cluster_name>-<osd_id> xfs
defaults,noatime 1 2" >> /etc/fstab
```

例

```
# parted /dev/sdb mklabel gpt
# parted /dev/sdb mkpart primary 1 10000
# parted /dev/sdb mkpart primary 10001 15000
# mkfs -t xfs /dev/sdb1
# mount -o noatime /dev/sdb1 /var/lib/ceph/osd/ceph-0
# echo "/dev/sdb1 /var/lib/ceph/osd/ceph-0 xfs defaults,noatime 1 2" >> /etc/fstab
```

8. **root** として、OSD データディレクトリーを初期化します。

構文

```
# ceph-osd -i <osd_id> --mkfs --mkkey --osd-uuid <uuid>
```

例

```
# ceph-osd -i 0 --mkfs --mkkey --osd-uuid b367c360-b364-4b1d-8fc6-09408a9cda7a
... auth: error reading file: /var/lib/ceph/osd/ceph-0/keyring: can't open /var/lib/ceph/osd/ceph-0/keyring: (2) No such file or directory
... created new key in keyring /var/lib/ceph/osd/ceph-0/keyring
```



注記

--mkkey オプションを指定して **ceph-osd** を実行する前に、ディレクトリーを空にする必要があります。カスタムのクラスタ名を使用する場合、**ceph-osd** ユーティリティーには **--cluster** オプションが必要です。

9. **root** として、OSD 認証キーを登録します。クラスタ名が **ceph** と異なる場合は、代わりにクラスタ名を挿入してください。

構文


```
# ceph auth add osd.<osd_id> osd 'allow *' mon 'allow profile osd' -i
/var/lib/ceph/osd/<cluster_name>-<osd_id>/keyring
```

例

```
# ceph auth add osd.0 osd 'allow *' mon 'allow profile osd' -i /var/lib/ceph/osd/ceph-0/keyring
added key for osd.0
```

10. **root** として、OSD ノードを CRUSH マップに追加します。

構文

```
# ceph [--cluster <cluster_name>] osd crush add-bucket <host_name> host
```

例

```
# ceph osd crush add-bucket node2 host
```

11. **root** で OSD ノードを **default** の CRUSH ツリーに配置します。

構文

```
# ceph [--cluster <cluster_name>] osd crush move <host_name> root=default
```

例

```
# ceph osd crush move node2 root=default
```

12. **root** として、OSD ディスクを CRUSH マップに追加します。

構文

```
# ceph [--cluster <cluster_name>] osd crush add osd.<osd_id> <weight> [<bucket_type>=
<bucket-name> ...]
```

例

```
# ceph osd crush add osd.0 1.0 host=node2
add item id 0 name 'osd.0' weight 1 at location {host=node2} to crush map
```

**注記**

CRUSH マップを逆コンパイルし、OSD をデバイス一覧に追加することもできます。OSD ノードをバケットとして追加してから、デバイスを OSD ノードの項目として追加し、OSD に重みを割り当て、CRUSH マップを再コンパイルし、CRUSH マップを設定します。詳細は、Red Hat Ceph Storage 3 の『ストレージ戦略ガイド』のセクション「[CRUSH マップの編集](#)」を参照してください。

13. **root** として、新しく作成されたディレクトリーおよびファイルで所有者とグループのアクセス権を更新します。

構文

```
# chown -R <owner>:<group> <path_to_directory>
```

例

```
# chown -R ceph:ceph /var/lib/ceph/osd
# chown -R ceph:ceph /var/log/ceph
# chown -R ceph:ceph /var/run/ceph
# chown -R ceph:ceph /etc/ceph
```

14. カスタム名を持つストレージクラスターの場合は、**root** として、次の行を `/etc/default/ceph` ファイルに追加します。

構文

```
$ sudo echo "CLUSTER=<custom_cluster_name>" >> /etc/default/ceph
```

例

```
$ sudo echo "CLUSTER=test123" >> /etc/default/ceph
```

15. OSD ノードは Ceph Storage クラスターの設定にあります。ただし、OSD デーモンは **down** および **in** です。新しい OSD は、データの受信開始前に **up** である必要があります。**root** として、OSD プロセスを有効にして開始します。

構文

```
$ sudo systemctl enable ceph-osd.target
$ sudo systemctl enable ceph-osd@<osd_id>
$ sudo systemctl start ceph-osd@<osd_id>
```

例

```
$ sudo systemctl enable ceph-osd.target
$ sudo systemctl enable ceph-osd@0
$ sudo systemctl start ceph-osd@0
```

OSD デーモンを起動すると、これが **up** および **in** になります。

モニターと一部の OSD が稼働しています。以下のコマンドを実行して、配置グループピアを監視できます。

```
$ ceph -w
```

OSD ツリーを表示するには、以下のコマンドを実行します。

```
$ ceph osd tree
```

例

ID	WEIGHT	TYPE	NAME	UP/DOWN	REWEIGHT	PRIMARY-AFFINITY
-1	2	root	default			
-2	2	host	node2			
0	1	osd	osd.0	up	1	1
-3	1	host	node3			
1	1	osd	osd.1	up	1	1

OSD をストレージクラスターに追加してストレージ容量を拡張するには、Red Hat Ceph Storage 3 『[管理ガイド](#)』の「[OSD の追加](#)」セクションを参照してください。

付録C CEPH コマンドラインインターフェースのインストール

Ceph コマンドラインインターフェース (CLI) により、管理者は Ceph 管理コマンドを実行できます。CLI は **ceph-common** パッケージにより提供され、以下のユーティリティーが含まれます。

- **ceph**
- **ceph-authtool**
- **ceph-dencoder**
- **rados**

前提条件

- 稼働中の Ceph ストレージクラスター (**active + clean** の状態が望ましい)。

手順

1. クライアントノードで、Red Hat Ceph Storage 3 Tools リポジトリを有効にします。

```
$ sudo bash -c 'umask 0077; echo deb
https://customername:customerpasswd@rhcs.download.redhat.com/3-updates/Tools
$(lsb_release -sc) main | tee /etc/apt/sources.list.d/Tools.list'
$ sudo bash -c 'wget -O - https://www.redhat.com/security/fd431d51.txt | apt-key add -'
$ sudo apt-get update
```

2. クライアントノードで、**ceph-common** パッケージをインストールします。

```
$ sudo apt-get install ceph-common
```

3. 最初の監視ノードから、Ceph 設定ファイル (ここでは **ceph.conf**) と管理キーリングをクライアントノードにコピーします。

構文

```
# scp /etc/ceph/<cluster_name>.conf <user_name>@<client_host_name>:/etc/ceph/
# scp /etc/ceph/<cluster_name>.client.admin.keyring
<user_name>@<client_host_name>:/etc/ceph/
```

例

```
# scp /etc/ceph/ceph.conf root@node1:/etc/ceph/
# scp /etc/ceph/ceph.client.admin.keyring root@node1:/etc/ceph/
```

<client_host_name> を、クライアントノードのホスト名に置き換えてください。

付録D CEPH ブロックデバイスの手動インストール

以下の手順では、シンプロビジョニングされ、サイズが変更可能な Ceph ブロックデバイスをインストールおよびマウントする方法を説明します。



重要

Ceph ブロックデバイスは、Ceph Monitor ノードと OSD ノードとは別のノードにデプロイする必要があります。同じノードでカーネルクライアントとカーネルサーバーデーモンを実行すると、カーネルのデッドロックが発生する可能性があります。

前提条件

- [付録C Ceph コマンドラインインターフェースのインストール](#) セクションに記載されているタスクを実施するしておく。
- QEMU を使用する仮想マシンのバックエンドとして Ceph ブロックデバイスを使用する場合は、デフォルトのファイル記述子を増やします。詳細は、ナレッジベースの記事「[Ceph - VM hangs when transferring large amounts of data to RBD disk](#)」を参照してください。

手順

1. OSD ノード (**osd 'allow rwx'**) 上のファイルへの完全なパーミッションを持つ **client.rbd** という名前の Ceph Block Device ユーザーを作成し、結果をキーリングファイルに出力します。

```
ceph auth get-or-create client.rbd mon 'profile rbd' osd 'profile rbd pool=<pool_name>' \
-o /etc/ceph/rbd.keyring
```

<pool_name> を、**client.rbd** によるアクセスを許可するプールの名前 (例: **rbd**) に置き換えます。

```
$ sudo ceph auth get-or-create \
client.rbd mon 'allow r' osd 'allow rwx pool=rbd' \
-o /etc/ceph/rbd.keyring
```

ユーザーの作成に関する詳細は、Red Hat Ceph Storage 3 『[管理ガイド](#)』の「[ユーザー管理](#)」セクションを参照してください。

2. ブロックデバイスイメージを作成します。

```
rbd create <image_name> --size <image_size> --pool <pool_name> \
--name client.rbd --keyring /etc/ceph/rbd.keyring
```

<image_name>、**<image_size>**、および **<pool_name>** を指定します。以下に例を示します。

```
$ rbd create image1 --size 4096 --pool rbd \
--name client.rbd --keyring /etc/ceph/rbd.keyring
```



警告

デフォルトの Ceph 設定には、以下の Ceph ブロックデバイス機能が含まれます。

- **layering**
- **exclusive-lock**
- **object-map**
- **deep-flatten**
- **fast-diff**

カーネル RBD (**krbd**) クライアントを使用する場合、Red Hat Enterprise Linux 7.3 に含まれている現在のカーネルバージョンは **object-map**、**deep-flatten**、および **fast-diff** をサポートしていないため、ブロックデバイスイメージをマップすることはできません。

この問題を回避するには、サポートされていない機能を無効にします。これを行うには、以下のいずれかのオプションを使用します。

- サポートされていない機能を動的に無効にします。

```
rbd feature disable <image_name> <feature_name>
```

以下に例を示します。

```
# rbd feature disable image1 object-map deep-flatten fast-diff
```

- **rbd create** コマンドで **--image-feature layering** オプションを使用して、新たに作成されたブロックデバイスイメージで **階層化** のみを有効にします。
- Ceph 設定ファイルで機能のデフォルトを無効にします。

```
rbd_default_features = 1
```

これは既知の問題です。詳細は、Red Hat Ceph Storage 3 の『リリースノート』の「[既知の問題](#)」の章を参照してください。

これらの機能はすべて、ユーザー空間の RBD クライアントを使用してブロックデバイスイメージにアクセスするユーザーに機能します。

3. 新規に作成されたイメージをブロックデバイスにマッピングします。

```
rbd map <image_name> --pool <pool_name>\
--name client.rbd --keyring /etc/ceph/rbd.keyring
```

以下に例を示します。

```
$ sudo rbd map image1 --pool rbd --name client.rbd \  
--keyring /etc/ceph/rbd.keyring
```

4. ファイルシステムを作成してブロックデバイスを使用します。

```
mkfs.ext4 -m5 /dev/rbd/<pool_name>/<image_name>
```

以下のように、プール名とイメージ名を指定します。

```
$ sudo mkfs.ext4 -m5 /dev/rbd/rbd/image1
```

この作業には少し時間がかかります。

5. 新しく作成されたファイルシステムをマウントします。

```
mkdir <mount_directory>  
mount /dev/rbd/<pool_name>/<image_name> <mount_directory>
```

以下に例を示します。

```
$ sudo mkdir /mnt/ceph-block-device  
$ sudo mount /dev/rbd/rbd/image1 /mnt/ceph-block-device
```

詳細は、Red Hat Ceph Storage 3 の [ブロックデバイスガイド](#) を参照してください。

付録E CEPH OBJECT GATEWAY の手動インストール

Ceph オブジェクトゲートウェイは RADOS ゲートウェイとしても知られている **librados** API 上に構築されたオブジェクトストレージインターフェースで、RESTful ゲートウェイを Ceph ストレージクラスターに提供します。

前提条件

- 稼働中の Ceph ストレージクラスター (**active + clean** の状態が望ましい)。
- [2章 Red Hat Ceph Storage のインストール要件](#) に記載されているタスクを実行します。

手順

- Red Hat Ceph Storage 3 Tools リポジトリを有効にします。

```
$ sudo bash -c 'umask 0077; echo deb
https://customername:customerpasswd@rhcs.download.redhat.com/3-updates/Tools
$(lsb_release -sc) main | tee /etc/apt/sources.list.d/Tools.list'
$ sudo bash -c 'wget -O - https://www.redhat.com/security/fd431d51.txt | apt-key add -'
$ sudo apt-get update
```

- Object Gateway ノードで、**radosgw** パッケージをインストールします。

```
$ sudo apt-get install radosgw
```

- 初期モニターノードで、以下の手順を実施します。

- 以下のように Ceph 設定ファイルを更新します。

```
[client.rgw.<obj_gw_hostname>]
host = <obj_gw_hostname>
rgw frontends = "civetweb port=80"
rgw dns name = <obj_gw_hostname>.example.com
```

ここで、**<obj_gw_hostname>** はゲートウェイノードの短縮ホスト名です。短縮ホスト名を表示するには、**hostname -s** コマンドを使用します。

- 更新された設定ファイルを新しい Object Gateway ノードおよび Ceph Storage クラスターのその他のノードにコピーします。

構文

```
$ sudo scp /etc/ceph/<cluster_name>.conf
<user_name>@<target_host_name>:/etc/ceph
```

例

```
$ sudo scp /etc/ceph/ceph.conf root@node1:/etc/ceph/
```

- <cluster_name>.client.admin.keyring** ファイルを新しい Object Gateway ノードにコピーします。

構文


```
$ sudo scp /etc/ceph/<cluster_name>.client.admin.keyring
<user_name>@<target_host_name>:/etc/ceph/
```

例

```
$ sudo scp /etc/ceph/ceph.client.admin.keyring root@node1:/etc/ceph/
```

- Object Gateway ノードで、データディレクトリーを作成します。

構文

```
$ sudo mkdir -p /var/lib/ceph/radosgw/<cluster_name>-rgw.`hostname -s`
```

例

```
$ sudo mkdir -p /var/lib/ceph/radosgw/ceph-rgw.`hostname -s`
```

- Object Gateway ノードで、ユーザーとキーリングを追加して、オブジェクトゲートウェイをブートストラップします。

構文

```
$ sudo ceph auth get-or-create client.rgw.`hostname -s` osd 'allow rwx' mon 'allow rw' -o
/var/lib/ceph/radosgw/<cluster_name>-rgw.`hostname -s`/keyring
```

例

```
$ sudo ceph auth get-or-create client.rgw.`hostname -s` osd 'allow rwx' mon 'allow rw' -o
/var/lib/ceph/radosgw/ceph-rgw.`hostname -s`/keyring
```

重要

ゲートウェイキーの機能を提供する場合は、読み取り機能を指定する必要があります。ただし、Monitor 書き込み機能を提供することはオプションです。指定した場合、Ceph Object Gateway はプールを自動的に作成できます。

このような場合は、プール内の配置グループの数に適切な数を指定してください。それ以外の場合、ゲートウェイはデフォルトの番号を使用しますが、これはニーズに適していない可能性があります。詳細は、[「Ceph Placement Groups \(PGs\) per Pool Calculator」](#) を参照してください。

- Object Gateway ノードで、**done** ファイルを作成します。

構文

```
$ sudo touch /var/lib/ceph/radosgw/<cluster_name>-rgw.`hostname -s`/done
```

例

```
$ sudo touch /var/lib/ceph/radosgw/ceph-rgw.`hostname -s`/done
```

- Object Gateway ノードで、所有者およびグループのパーミッションを変更します。

```
$ sudo chown -R ceph:ceph /var/lib/ceph/radosgw
$ sudo chown -R ceph:ceph /var/log/ceph
$ sudo chown -R ceph:ceph /var/run/ceph
$ sudo chown -R ceph:ceph /etc/ceph
```

- カスタム名を持つストレージクラスターの場合、**root** として次の行を追加します。

構文

```
$ sudo echo "CLUSTER=<custom_cluster_name>" >> /etc/default/ceph
```

例

```
$ sudo echo "CLUSTER=test123" >> /etc/default/ceph
```

- Object Gateway ノードで、TCP ポート 80 を開きます。

```
$ sudo iptables -I INPUT 1 -i <network_interface> -p tcp -s <ip_address>/<netmask> --dport 80 -j ACCEPT
```

- Object Gateway ノードで、**ceph-radosgw** プロセスを開始して有効にします。

構文

```
$ sudo systemctl enable ceph-radosgw.target
$ sudo systemctl enable ceph-radosgw@rgw.<rgw_hostname>
$ sudo systemctl start ceph-radosgw@rgw.<rgw_hostname>
```

例

```
$ sudo systemctl enable ceph-radosgw.target
$ sudo systemctl enable ceph-radosgw@rgw.node1
$ sudo systemctl start ceph-radosgw@rgw.node1
```

インストールが完了すると、書き込み機能が Monitor に設定されると、Ceph Object Gateway はプールを自動的に作成します。プールを手動で作成する方法は、ストレージ戦略ガイドの [プール](#) の章を参照してください。

詳細

- Red Hat Ceph Storage 3 [Ubuntu 用のオブジェクトゲートウェイガイド](#)

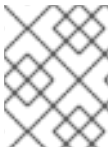
付録F CEPH のデフォルト設定の上書き

Ansible 設定ファイルに特に指定しない限り、Ceph はデフォルト設定を使用します。

Ansible は Ceph 設定ファイルを管理するため、`/usr/share/ceph-ansible/group_vars/all.yml` ファイルを編集して Ceph の設定を変更します。`ceph_conf_overrides` の設定を使用して、デフォルトの Ceph 設定を上書きします。

Ansible は、Ceph 設定ファイル (`[global]`、`[mon]`、`[osd]`、`[mds]`、`[rgw]` など) と同じセクションをサポートします。特定の Ceph Object Gateway インスタンスなどの特定のインスタンスをオーバーライドすることもできます。以下に例を示します。

```
#####  
# CONFIG OVERRIDE #  
#####  
  
ceph_conf_overrides:  
  client.rgw.rgw1:  
    log_file: /var/log/ceph/ceph-rgw-rgw1.log
```



注記

Ansible には、Ceph 設定ファイルの特定セクションを参照する際に中かっこが含まれません。セクション名および設定名はコロンで終了します。



重要

`CONFIG OVERRIDE` セクションの `cluster_network` パラメーターを使用してクラスターネットワークを設定しないでください。競合する 2 つのクラスターネットワークが Ceph 設定ファイルに設定されている可能性があるためです。

クラスターネットワークを設定するには、`CEPH CONFIGURATION` セクションで `cluster_network` パラメーターを使用します。詳細は、[「Red Hat Ceph Storage クラスターのインストール」](#) を参照してください。

付録G RED HAT CEPH STORAGE 2 から 3 への手動アップグレード

Ceph Storage Cluster は、クラスターの実行中にローリング方式でバージョン 2 からバージョン 3 にアップグレードできます。クラスター内の各ノードを順番にアップグレードします。前のノードが完了した後でのみ、次のノードに進みます。

Red Hat では、以下の順序で Ceph コンポーネントをアップグレードすることをお勧めします。

- ノードの監視
- OSD ノード
- Ceph Object Gateway ノード
- その他すべての Ceph クライアントノード

Red Hat Ceph Storage 3 では、新しいデーモン Ceph Manager (**ceph-mgr**) が導入されています。モニターノードをアップグレードした後、**ceph-mgr** をインストールします。

Red Hat Ceph Storage 2 を 3 にアップグレードするには、2 つの方法があります。

- Red Hat のコンテンツ配信ネットワーク (CDN) の使用
- Red Hat が提供する ISO イメージファイルを使用する

ストレージクラスターをアップグレードした後、レガシーチューナブルを使用して CRUSH マップに関するヘルス警告を出すことができます。詳細は、Red Hat Ceph Storage3 のストレージ戦略ガイドの [CRUSH Tunables](#) セクションを参照してください。

例

```
$ ceph -s
cluster 848135d7-cdb9-4084-8df2-fb5e41ae60bd
health HEALTH_WARN
  crush map has legacy tunables (require bobtail, min is firefly)
monmap e1: 1 mons at {ceph1=192.168.0.121:6789/0}
  election epoch 2, quorum 0 ceph1
osdmap e83: 2 osds: 2 up, 2 in
pgmap v1864: 64 pgs, 1 pools, 38192 kB data, 17 objects
  10376 MB used, 10083 MB / 20460 MB avail
  64 active+clean
```



重要

Red Hat は、すべての Ceph クライアントが Ceph ストレージクラスターと同じバージョンを実行することを推奨しています。

前提条件

- アップグレードするクラスターに **exclusive-lock** 機能を使用する Ceph Block Device イメージが含まれている場合には、全 Ceph Block Device ユーザーにクライアントをブラックリストに登録するパーミッションがあるようにしてください。

```
ceph auth caps client.<ID> mon 'allow r, allow command "osd blacklist"' osd '<existing-OSD-user-capabilities>'
```

モニタノードのアップグレード

この項では、Ceph Monitorノードを後のバージョンにアップグレードする手順を説明します。モニターの数には奇数でなければなりません。1つの Monitor をアップグレードしている間、ストレージクラスターにはクォーラムがあります。

手順

ストレージクラスターの各 Monitor ノードで以下の手順を行います。一度に1つの Monitor ノードのみをアップグレードします。

1. ソフトウェアリポジトリを使用して Red Hat Ceph Storage 2 をインストールした場合は、リポジトリを無効にします。
 - a. 以下の行が `/etc/apt/sources.list` または `/etc/apt/sources.list.d/ceph.list` ファイルにある場合は、行の先頭にハッシュ記号 (`#`) を追加して、Red Hat Ceph Storage 2 のオンラインリポジトリをコメントアウトします。

```
deb https://<customer_name>:
<customer_password>@rhcs.download.redhat.com/ubuntu/2-updates/Installer
deb https://<customer_name>:
<customer_password>@rhcs.download.redhat.com/ubuntu/2-updates/Tools
```

- b. 以下のファイルを `/etc/apt/sources.list.d/` ディレクトリーから削除してください。

```
Installer.list
Tools.list
```

2. Red Hat Ceph Storage 3 Monitor リポジトリを有効にします。

```
$ sudo bash -c 'umask 0077; echo deb
https://customername:customerpasswd@rhcs.download.redhat.com/3-updates/MON
$(lsb_release -sc) main | tee /etc/apt/sources.list.d/MON.list'
$ sudo bash -c 'wget -O - https://www.redhat.com/security/fd431d51.txt | apt-key add -'
$ sudo apt-get update
```

3. **root** で Monitor プロセスを停止します。

構文

```
$ sudo stop ceph-mon id=<monitor_host_name>
```

例

```
$ sudo stop ceph-mon id=node1
```

4. **root** で、**ceph-mon** パッケージをアップデートします。

```
$ sudo apt-get update
$ sudo apt-get dist-upgrade
$ sudo apt-get install ceph-mon
```

- a. Red Hat の最新バージョンがインストールされていることを確認します。

```
$ dpkg -s ceph-base | grep Version
Version: 10.2.2-19redhat1trusty
```

5. **root** として、所有者とグループの権限を更新します。

構文

```
# chown -R <owner>:<group> <path_to_directory>
```

例

```
# chown -R ceph:ceph /var/lib/ceph/mon
# chown -R ceph:ceph /var/log/ceph
# chown -R ceph:ceph /var/run/ceph
# chown ceph:ceph /etc/ceph/ceph.client.admin.keyring
# chown ceph:ceph /etc/ceph/ceph.conf
# chown ceph:ceph /etc/ceph/rbdmap
```



注記

Ceph Monitor ノードが OpenStack Controller ノードと同じ場所にある場合、Glance および Cinder キーリングファイルは、それぞれ **glance** および **cinder** によって所有されている必要があります。以下に例を示します。

```
# ls -l /etc/ceph/
...
-rw-----. 1 glance glance    64 <date> ceph.client.glance.keyring
-rw-----. 1 cinder cinder    64 <date> ceph.client.cinder.keyring
...
```

6. 不要になったパッケージを削除します。

```
$ sudo apt-get purge ceph ceph-osd
```

7. **root** として、カーネルからデバイスイベントを再生します。

```
# udevadm trigger
```

8. **root** として、**ceph-mon** プロセスを有効にします。

```
$ sudo systemctl enable ceph-mon.target
$ sudo systemctl enable ceph-mon@<monitor_host_name>
```

9. **root** で Monitor ノードを再起動します。

```
# shutdown -r now
```

10. Monitor ノードが起動したら、次の Monitor ノードに移動する前に、Ceph ストレージクラスターの状態を確認します。

```
# ceph -s
```

G.1. CEPH MANAGER の手動インストール

通常、Ansible 自動化ユーティリティーは、Red Hat Ceph Storage クラスターをデプロイする際に Ceph Manager デーモン (**ceph-mgr**) をインストールします。ただし、Ansible を使用して Red Hat Ceph Storage を管理しない場合は、Ceph Manager を手動でインストールすることができます。Red Hat は、Ceph Manager デーモンと Ceph Monitor デーモンを同じノードに配置することを推奨します。

前提条件

- 稼働中の Red Hat Ceph Storage クラスター
- root** または **sudo** アクセス
- rhel-7-server-rhceph-3-mon-els-rpms** リポジトリが有効
- ファイアウォールを使用している場合は、パブリックネットワーク上でポート **6800-7300** を開く

手順

ceph-mgr がデプロイされるノードで、**root** ユーザーまたは **sudo** ユーティリティーで以下のコマンドを使用します。

- ceph-mgr** パッケージをインストールします。

```
[user@node1 ~]$ sudo apt-get install ceph-mgr
```

- /var/lib/ceph/mgr/ceph-hostname/** ディレクトリーを作成します。

```
mkdir /var/lib/ceph/mgr/ceph-hostname
```

hostname を、**ceph-mgr** デーモンがデプロイされるノードのホスト名に置き換えます。以下に例を示します。

```
[user@node1 ~]$ sudo mkdir /var/lib/ceph/mgr/ceph-node1
```

- 新しく作成されたディレクトリーで、**ceph-mgr** デーモンの認証キーを作成します。

```
[user@node1 ~]$ sudo ceph auth get-or-create mgr.`hostname -s` mon 'allow profile mgr' osd 'allow *' mds 'allow *' -o /var/lib/ceph/mgr/ceph-node1/keyring
```

- /var/lib/ceph/mgr/** ディレクトリーの所有者とグループを **ceph:ceph** に変更します。

```
[user@node1 ~]$ sudo chown -R ceph:ceph /var/lib/ceph/mgr
```

- ceph-mgr** ターゲットを有効にします。

```
[user@node1 ~]$ sudo systemctl enable ceph-mgr.target
```

- ceph-mgr** インスタンスを有効にして開始します。

```
systemctl enable ceph-mgr@hostname
systemctl start ceph-mgr@hostname
```

hostname を、**ceph-mgr** をデプロイするノードのホスト名に置き換えます。以下に例を示します。

```
[user@node1 ~]$ sudo systemctl enable ceph-mgr@node1
[user@node1 ~]$ sudo systemctl start ceph-mgr@node1
```

7. **ceph-mgr** デーモンが正常に起動していることを確認します。

```
ceph -s
```

出力には、**services:** セクションの下に以下の行と同様の行が含まれます。

```
mgr: node1(active)
```

8. 追加の **ceph-mgr** デーモンをインストールして、現在のアクティブなデーモンに障害が発生した場合にアクティブになるスタンバイデーモンとして機能します。

関連情報

- [「Red Hat Ceph Storage のインストール要件」](#)

OSD ノードのアップグレード

この項では、Ceph OSD ノードを後のバージョンにアップグレードする手順を説明します。

前提条件

OSD ノードをアップグレードすると、OSD が停止または再起動する可能性があるため、一部の配置グループがデグレードされます。Ceph がリカバリープロセスを開始しないようにするには、Monitor ノードで、**noout** および **norebalance** OSD フラグを設定します。

```
[root@monitor ~]# ceph osd set noout
[root@monitor ~]# ceph osd set norebalance
```

手順

ストレージクラスタの各 OSD ノードで以下の手順を行います。一度に1つの OSD ノードのみをアップグレードします。Red Hat Ceph Storage 2.3 に対して ISO ベースのインストールが実行された場合は、この最初のステップをスキップしてください。

1. **root** で、Red Hat Ceph Storage 2 のリポジトリを無効にします。
 - a. 以下の行が **/etc/apt/sources.list** または **/etc/apt/sources.list.d/ceph.list** ファイルにある場合は、行の先頭にハッシュ記号 (**#**) を追加して、Red Hat Ceph Storage 2 のオンラインリポジトリをコメントアウトします。

```
deb https://<customer_name>:
<customer_password>@rhcs.download.redhat.com/ubuntu/2-updates/Installer
deb https://<customer_name>:
<customer_password>@rhcs.download.redhat.com/ubuntu/2-updates/Tools
```

- b. 以下のファイルを **/etc/apt/sources.list.d/** ディレクトリーから削除してください。


```
Installer.list
Tools.list
```



注記

APT ソースファイル内の Red Hat Ceph Storage2 への参照をすべて削除します。Red Hat Ceph Storage 2 に対して ISO ベースのインストールが実行された場合は、この最初のステップをスキップしてください。

- Red Hat Ceph Storage 3 OSD リポジトリを有効にします。

```
$ sudo bash -c 'umask 0077; echo deb
https://customername:customerpasswd@rhcs.download.redhat.com/3-updates/OSD
$(lsb_release -sc) main | tee /etc/apt/sources.list.d/OSD.list'
$ sudo bash -c 'wget -O - https://www.redhat.com/security/fd431d51.txt | apt-key add -'
$ sudo apt-get update
```

- root** として、実行中の OSD プロセスをすべて停止します。

構文

```
$ sudo stop ceph-osd id=<osd_id>
```

例

```
$ sudo stop ceph-osd id=0
```

- root** として、**ceph-osd** パッケージを更新します。

```
$ sudo apt-get update
$ sudo apt-get dist-upgrade
$ sudo apt-get install ceph-osd
```

- Red Hat の最新バージョンがインストールされていることを確認します。

```
$ dpkg -s ceph-base | grep Version
Version: 10.2.2-19redhat1trusty
```

- root** として、新しく作成されたディレクトリーおよびファイルで所有者とグループのアクセス権を更新します。

構文

```
# chown -R <owner>:<group> <path_to_directory>
```

例

```
# chown -R ceph:ceph /var/lib/ceph/osd
# chown -R ceph:ceph /var/log/ceph
# chown -R ceph:ceph /var/run/ceph
# chown -R ceph:ceph /etc/ceph
```



注記

次の **find** コマンドを使用すると、多数のディスクがある Ceph ストレージクラスターで **chown** コマンドを並行して使用することにより、所有権を変更するプロセスが速くなる可能性があります。

```
# find /var/lib/ceph/osd -maxdepth 1 -mindepth 1 -print | xargs -P12 -n1 chown
-R ceph:ceph
```

6. 不要になったパッケージを削除します。

```
$ sudo apt-get purge ceph ceph-mon
```



注記

ceph パッケージがメタパッケージになりました。Monitor ノードでは **ceph-mon** パッケージのみが必要であり、OSD ノードでは **ceph-osd** パッケージのみが必要であり、RADOSGateway ノードでは **ceph-radosgw** パッケージのみが必要です。

7. **root** として、カーネルからデバイスイベントを再生します。

```
# udevadm trigger
```

8. **root** として、**ceph-osd** プロセスを有効にします。

```
$ sudo systemctl enable ceph-osd.target
$ sudo systemctl enable ceph-osd@<osd_id>
```

9. **root** として、OSD ノードを再起動します。

```
# shutdown -r now
```

10. 次の OSD ノードに移動します。



注記

noout フラグと **norebalance** フラグが設定されている場合、ストレージクラスターは **HEALTH_WARN** 状態になります。

```
$ ceph health
HEALTH_WARN noout,norebalance flag(s) set
```

Ceph Storage Cluster のアップグレードが完了したら、以前に設定した OSD フラグの設定を解除し、ストレージクラスターのステータスを確認します。

モニターノードで、すべての OSD ノードがアップグレードされた後、**noout** フラグと **norebalance** フラグの設定を解除します。

```
# ceph osd unset noout
# ceph osd unset norebalance
```

さらに、**ceph osd require-osd-release <release>** コマンドを実行します。このコマンドにより、Red Hat Ceph Storage 2.3 を搭載した OSD をストレージクラスターに追加できなくなります。このコマンドを実行しない場合、ストレージステータスは **HEALTH_WARN** になります。

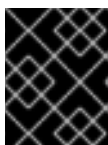
```
# ceph osd require-osd-release luminous
```

関連情報

- ストレージクラスターに新しい OSD を追加してストレージ容量を拡張するには、Red Hat Ceph Storage 3 の [管理ガイド](#) の [OSD の追加](#) セクションを参照してください。

Ceph Object Gateway ノードのアップグレード

このセクションでは、Ceph Object Gateway ノードを新しいバージョンにアップグレードする手順について説明します。



重要

Red Hat は、これらのアップグレード手順を続行する前に、システムをバックアップすることをお勧めします。

前提条件

- Red Hat は、[HAProxy](#) などのロードバランサーの背後に Ceph Object Gateway を配置することをお勧めします。ロードバランサーを使用する場合は、リクエストが処理されなくなったら、ロードバランサーから Ceph Object Gateway を削除します。
- **rgw_region_root_pool** パラメーターで指定されたリージョンプールのカスタム名を使用する場合は、Ceph 構成ファイルの **[global]** セクションに **rgw_zonegroup_root_pool** パラメーターを追加します。**rgw_zonegroup_root_pool** の値を **rgw_region_root_pool** と同じになるように設定します。次に例を示します。

```
[global]
rgw_zonegroup_root_pool = .us.rgw.root
```

手順

ストレージクラスター内の各 Ceph Object Gateway ノードで次の手順を実行します。一度に1つのノードのみをアップグレードします。

1. オンラインリポジトリを使用して Red Hat Ceph Storage をインストールした場合は、2つのリポジトリを無効にします。
 - a. **/etc/apt/sources.list** ファイルと **/etc/apt/sources.list.d/ceph.list** ファイルの次の行をコメントアウトします。

```
# deb https://<customer_name>:
<customer_password>@rhcs.download.redhat.com/ubuntu/2-updates/Installer
# deb https://<customer_name>:
<customer_password>@rhcs.download.redhat.com/ubuntu/2-updates/Tools
```

- b. **/etc/apt/sources.list.d/** ディレクトリーから次のファイルを削除します。

```
# rm /etc/apt/sources.list.d/Installer.list
# rm /etc/apt/sources.list.d/Tools.list
```

- Red Hat Ceph Storage 3 Tools リポジトリを有効にします。

```
$ sudo bash -c 'umask 0077; echo deb
https://customername:customerpasswd@rhcs.download.redhat.com/3-updates/Tools
$(lsb_release -sc) main | tee /etc/apt/sources.list.d/Tools.list'
$ sudo bash -c 'wget -O - https://www.redhat.com/security/fd431d51.txt | apt-key add -'
$ sudo apt-get update
```

- Ceph Object Gateway プロセス (**ceph-radosgw**) を停止します。

```
$ sudo stop radosgw id=rgw.<hostname>
```

<hostname> を Ceph Object Gateway ホストの名前 (**gateway-node** など) に置き換えます。

```
$ sudo stop radosgw id=rgw.node
```

- ceph-radosgw** パッケージを更新します。

```
$ sudo apt-get update
$ sudo apt-get dist-upgrade
$ sudo apt-get install radosgw
```

- 新しく作成された **/var/lib/ceph/radosgw/** および **/var/log/ceph/** ディレクトリーとそれらのコンテンツに対する所有者とグループの権限を **ceph** に変更します。

```
# chown -R ceph:ceph /var/lib/ceph/radosgw
# chown -R ceph:ceph /var/log/ceph
```

- 不要になったパッケージを削除します。

```
$ sudo apt-get purge ceph
```



注記

ceph パッケージがメタパッケージになりました。Monitor、OSD、Ceph Object Gatewayの各ノードでは、**ceph-mon**、**ceph-osd**、**ceph-radosgw** パッケージのみが必要です。

- ceph-radosgw** プロセスを有効にします。

```
$ sudo systemctl enable ceph-radosgw.target
$ sudo systemctl enable ceph-radosgw@rgw.<hostname>
```

<hostname> を Ceph Object Gateway ホストの名前 (**gateway-node** など) に置き換えます。

```
$ sudo systemctl enable ceph-radosgw.target
$ sudo systemctl enable ceph-radosgw@rgw.gateway-node
```

- Ceph Object Gateway ノードを再起動します。

```
# shutdown -r now
```

- ロードバランサーを使用する場合は、Ceph Object Gateway ノードをロードバランサーに追加し直します。

関連項目

- [Ubuntu 用の Ceph Object Gateway ガイド](#)

Ceph クライアントノードのアップグレード

Ceph のクライアントは

- Ceph ブロックデバイス
- OpenStack Nova コンピュートノード
- QEMU/KVM ハイパーバイザー
- Ceph クライアント側ライブラリーを使用するカスタムアプリケーション

Red Hat は、すべての Ceph クライアントが Ceph ストレージクラスターと同じバージョンを実行することを推奨しています。

前提条件

- パッケージのアップグレード中に Ceph クライアントノードに対するすべての I/O 要求を停止して、予期しないエラーが発生しないようにします

手順

- ソフトウェアリポジトリを使用して Red Hat Ceph Storage 2 クライアントをインストールした場合は、リポジトリを無効にします。
 - 以下の行が `/etc/apt/sources.list` または `/etc/apt/sources.list.d/ceph.list` ファイルにある場合は、行の先頭にハッシュ記号 (`#`) を追加して、Red Hat Ceph Storage 2 のオンラインリポジトリをコメントアウトします。

```
deb https://<customer_name>:
<customer_password>@rhcs.download.redhat.com/ubuntu/2-updates/Installer
deb https://<customer_name>:
<customer_password>@rhcs.download.redhat.com/ubuntu/2-updates/Tools
```

- 以下のファイルを `/etc/apt/sources.list.d/` ディレクトリーから削除してください。

```
Installer.list
Tools.list
```



注記

APT ソースファイル内の Red Hat Ceph Storage2 への参照をすべて削除します。

- クライアントノードで、Red Hat Ceph Storage Tools 3 リポジトリを有効にします。

```
$ sudo bash -c 'umask 0077; echo deb
https://customername:customerpasswd@rhcs.download.redhat.com/3-updates/Tools
$(lsb_release -sc) main | tee /etc/apt/sources.list.d/Tools.list'
```

```
$ sudo bash -c 'wget -O - https://www.redhat.com/security/fd431d51.txt | apt-key add -'  
$ sudo apt-get update
```

3. クライアントノードで、**ceph-common** パッケージを更新します。

```
$ sudo apt-get install ceph-common
```

ceph-common パッケージをアップグレードした後、Ceph クライアントサイドライブラリーに依存するアプリケーションを再起動します。



注記

QEMU/KVM インスタンスを実行している OpenStack Nova コンピュートノードをアップグレードする場合や、専用の QEMU/KVM クライアントを使用する場合には、インスタンスを再起動しても機能しないため、QEMU/KVM インスタンスを停止して起動してください。

付録Hバージョン2と3の間のANSIBLE変数の変更

Red Hat Ceph Storage 3 では、`/usr/share/ceph-ansible/group_vars/` ディレクトリーにある構成ファイルの特定の変数が変更されたか、削除されました。以下の表は、すべての変更点を示しています。バージョン3へのアップグレード後は、`all.yml.sample` と `osds.yml.sample` を再度コピーし、これらの変更を反映させてください。詳細は、[Red Hat Ceph ストレージクラスターのアップグレード](#) を参照してください。

旧オプション	新しいオプション	ファイル
<code>ceph_rhcs_cdn_install</code>	<code>ceph_repository_type: cdn</code>	<code>all.yml</code>
<code>ceph_rhcs_iso_install</code>	<code>ceph_repository_type: iso</code>	<code>all.yml</code>
<code>ceph_rhcs</code>	<code>ceph_origin: repository</code> および <code>ceph_repository:rhcs</code> (デフォルトで有効)	<code>all.yml</code>
<code>journal_collocation</code>	<code>osd_scenario: collocated</code>	<code>osds.yml</code>
<code>raw_multi_journal</code>	<code>osd_scenario: non-collocated</code>	<code>osds.yml</code>
<code>raw_journal_devices</code>	<code>dedicated_devices</code>	<code>osds.yml</code>
<code>dmcrypt_journal_collocation</code>	<code>dmcrypt: true + osd_scenario: collocated</code>	<code>osds.yml</code>
<code>dmcrypt_dedicated_journal</code>	<code>dmcrypt: true + osd_scenario: non-collocated</code>	<code>osds.yml</code>

付録I 既存の CEPH クラスターの ANSIBLE へのインポート

Ansible が Ansible なしでデプロイされたクラスターを使用するように設定することができます。たとえば、Red Hat Ceph Storage 1.3 クラスターを手動でバージョン 2 にアップグレードした場合は、以下の手順により Ansible を使用するように設定してください。

1. バージョン 1.3 からバージョン 2 に手動でアップグレードした後、管理ノードに Ansible をインストールおよび設定します。
2. Ansible 管理ノードに、クラスター内の全 Ceph ノードにパスワードレスの **ssh** アクセスがあることを確認します。詳しくは「[Ansible でパスワードなしの SSH を有効にする](#)」をご覧ください。
3. **root** で、`/etc/ansible/` ディレクトリーに Ansible の **group_vars** ディレクトリーへのシンボリックリンクを作成します。

```
# ln -s /usr/share/ceph-ansible/group_vars /etc/ansible/group_vars
```

4. **root** で **all.yml.sample** ファイルから **all.yml** ファイルを作成し、編集用に開きます。

```
# cd /etc/ansible/group_vars
# cp all.yml.sample all.yml
# vim all.yml
```

5. **group_vars/all.yml** で **generate_fsid** 設定を **false** に設定します。
6. **ceph fsid** を実行して、現在のクラスター **fsid** を取得します。
7. 取得した **fsid** を **group_vars/all.yml** に設定します。
8. Ceph ホストが含まれるように、`/etc/ansible/hosts` の Ansible インベントリーを変更します。**[mons]** セクションの下にモニター、**[osds]** セクションの下に OSD、および **[rgws]** セクションのゲートウェイを追加して、それらのロールを Ansible に特定します。
9. **ceph_conf_overrides** セクションが、**all.yml** ファイルの **[global]** セクション、**[osd]** セクション、**[mon]** セクション、および **[client]** セクションに使用される元の **ceph.conf** オプションで更新されていることを確認します。
osd ジャーナル、**public_network**、**cluster_network** などのオプションはすでに **all.yml** に含まれているため、**ceph_conf_overrides** には追加しないでください。**all.yml** に含まれず、元の **ceph.conf** にあるオプションのみを **ceph_conf_overrides** に追加する必要があります。
10. `/usr/share/ceph-ansible/` ディレクトリーから Playbook を実行します。

```
# cd /usr/share/ceph-ansible/
# cp infrastructure-playbooks/take-over-existing-cluster.yml .
$ ansible-playbook take-over-existing-cluster.yml -u <username>
```


付録J ANSIBLE を使用して CEPH クラスターをパーズする

Ansible を使用して Ceph クラスターをデプロイし、クラスターをパーズする場合は、**infrastructure-playbooks** ディレクトリーにある **purge-cluster.yml** Ansible Playbook を使用します。



重要

Ceph クラスターをパーズすると、クラスターの OSD に保存されているデータが失われます。

Ceph クラスターをパーズする前に...

osds.yml ファイルの **osd_auto_discovery** オプションを確認してください。このオプションが **true** に設定されていると、パーズは失敗します。この不具合を防ぐために、パーズを実行する前に以下の手順を行ってください。

1. **osds.yml** ファイルで OSD デバイスを宣言します。詳しくは「[Red Hat Ceph Storage クラスターのインストール](#)」をご覧ください。
2. **osds.yml** ファイルの **osd_auto_discovery** オプションをコメントアウトします。

Ceph クラスターをパーズするには...

1. **root** として **/usr/share/ceph-ansible/** ディレクトリーに移動します。

```
# cd /usr/share/ceph-ansible
```

2. **root** で、**purge-cluster.yml** Ansible playbook をカレントディレクトリーにコピーします。

```
# cp infrastructure-playbooks/purge-cluster.yml .
```

3. **purge-cluster.yml** Ansible playbook を実行します:

```
$ ansible-playbook purge-cluster.yml
```